

校歌 永遠の幸

(札幌農学校校歌)

大和田建樹氏 校閲

有島武朗君 作歌

納所弁次郎氏 選曲

一

永遠^{とこしへ}の幸^{さち}朽^くちざる 誉^{ほまれ}

つねに我等^{われら}がうへにあれ

よるひる育^{そだ}てあけれ 教^{おし}へ

人^{ひと}となしし我庭^{わがにわ}に

(※)

イザイザイザ

うちつれて進^{すす}むは今^{いま}ぞ

豊平^{とよひら}の川^{かわ}尽^{つき}せぬながれ

友^{とも}たれ永^{なが}く友^{とも}たれ

二

北斗^{ほくと}をつかんだかき希望^{のぞみ}は

時代^{とき}を照^{てら}す光^{ひかり}なり

深雪^{みゆき}を凌^{しの}ぐ潔^{きよ}き節操^{みさお}は

国^{くに}を守る力^{ちから}なり

(※繰り返し)

三

山^{やま}は裂^さくとも海^{うみ}はあすとも

真理^{しんり}正義^{せいぎ}おつべしや

不朽^{ふくしゅう}を求め意気^{いき}相^{あい}ゆるす

我等^{われら}丈夫^{ますら}此^こにあり

(※繰り返し)

(注 有島武郎在学中の明治三十三年の作。)

大和田建樹(二八五六 - 一九一〇)は作詞の面で、

納所弁次郎(二八六五 - 一九三六)は作曲の面で、

共に近代日本唱歌史に大きな足跡を残した。)

一帯ゆるぎ

(明治四十年寮歌)

田中義麿君 作歌
高松正信君 作曲

一

一帯ゆるぎ石狩の
源遠く霞罩め
五彩を染むる夕照は
手稻の夏の栄にして
そこに無限の恩寵あり
是吾校の在る処

二

胡沙吹く風に秋闌けて
黄葉散りしく牧場千里
満野の吹雪叱咤する
エルムの姿壮なれや
そこに無限の偉力あり
是吾寮の在る処

三

偲へば遠き三十年の
榛莽あしたの日を蔽ひ
ゆふべの月に罷熊吼ゆる
北海の野に鋤入れて
偉人が植ゑし桜花
薫は高し千万古

四

海を距てて南の
空の彼方を眺むれば
古人の道は跡もなく
文明の徳は尚成らず
溟濛天に漲りて
帰鳥夕に彷徨ひぬ

五

颺々として風狂ひ
北海の潮黒むとき
電光淒く駛りては
鬼啾々の声すなり
破邪の剣を右手にして
起てるは誰ぞや吾健児

六

岩間に咽ぶ溪流も
明日は黄河に波うたむ
蟄竜遂に雲を呼び
鳳雛やがて時を得て
扶揺に搏つて騰りなば
蜩蜩遂に影もなし

太虚の齡

(明治四十一年寮歌)

田中義麿君 作歌

早川直瀬君・前川徳次郎君 作曲

一

太虚の齡は知らねども
興廢うつる人の世の
文化の跡は四千年
ありし往昔を温ね来て
吾が世の狀態を眺むれば
希望ある前途かな

二

嘗てナイルの河水に
偉影涵せし金字塔
アテネの春も夢なれや
ローマの紅紫また散りて
欧米の空今正に
文化の花ぞ盛なる

三

偉大ならずや雪潔き
ヒマラヤ山下風薫り
四百余州に吹き入れば
聖賢雲と叢起して
深き思想は東洋の
青史不朽の誇あり

四

今東海の一孤島
文化の潮寄せ来り
東西の岸を洗ひつつ
高き響を伝ふなり
孤島にこもる国民の
使命などかは軽からん

五

既に天地の利は獲たり
人和豈それなからんや
満韓の原遺利多く
アルゼンタイン野は広し
故人の教訓聴かざるや
「ビーアンビシアスボーイズ」と

六

猛き心の往くところ
虎狼鯨鰐ものならず
テキサス鋏を入るる可く
シベリヤ斧を振ふ可し
故人の教訓膺にせよ
「ビーアンビシアスボーイズ」と

希望の光

(明治四十二年寮歌)

加藤茂雄君 作歌
金原善知君 作曲

一

希望の光仰ぎつつ
おもへば友と尋ね来し
山は紅朝日子の
燃ゆる姿に似たる哉
嘶く駒は秋に肥え
我等が門出栄ありき

二

ああ冬寒し北国の
大野の果を眺むれば
雪かあられか空たえて
限りは知らず暮るとも
我等が胸に黙想あり
星の光に啓示あり

三

黙想を胸に結ぶ時
啓示を空に望む時
見よ下萌ゆる若草の
息吹さやかに風薫る
春は来れり春は来ぬ
物皆此処に力あり

四

春の光の照る所
色を交へて咲く花に
蝶舞ひ鳥は囀りて
我等が血潮躍るなり
斯くて見渡す行手には
光蔽はん影もなし

五

深く霞に鎖されて
都の様は知らねども
夕孤雁の声聞けば
人太平に眠るとや
吹雪に練りし双の腕
鳴るよ常盤の夢醒ませ

六

四年の昔人々の
転り建てし我が寮に
春立ち還る時よ今
希望の光新なり
さらば起て友諸共に
我等起つべき時なれば

帝都を北に

(明治四十三年寮歌)

谷村愛之助君 作歌

柳沢秀雄君 作曲

一

ていと きた さんびやくり
帝都を北に三百里
つがる うみ
津軽の海を越え来れば
こうじん た
紅塵絶えて空潔く
せうせう
蕭々として水寒し
たいりく せいあつ
大陸の精鍾まりて
わがほくしう
我北州の島と凝る

二

げいぐん ほ
鯨群吼ゆる荒潮に
おと ほくと かげさ
落つる北斗の影冴えて
ふあつ い
斧鉞入らざるや森林や
じんせき た
人跡絶えし大野原
げん し まま おもかけ
原始の儘の俤を
わがほくしう
我北州の島に見る

三

すずらん かほ はる
鈴蘭薫る春の野辺
しもかけさしげ
榆の下蔭草繁る
そうよう も
霜葉燃ゆる蔦葛
ふぶき
吹雪は叫ぶ冬の夜半
しき へんせんきようそ
四季の変遷興添えて
なが
眺めは飽かぬ姿かな

四

あさぎりふか の おも
朝霧深き野の面に
いなな こま あとお
嘶く駒の跡追へば
つゆ しらたまち みだ
露の白玉散り乱る
かんらん
甘藍の畑たそがれて
ブラウの土を払ふ時
のうばく ささうた
農牧の幸謳ふかな

五

み ぶんめい ほくしん
見よ文明は北進す
このう せい
古囊は盛らず新酒を
しんぶんめい けんせつ
新文明の建設は
みやく
濁れる都にあらずして
びよう たいが かたほとり
渺たる大河の片辺
ち こうばく ちゅうせきそう
地は広漠の沖積層

六

このせいと としへ
此聖都を永久に
ふかけいとう
浮華輕佻の国とせず
しんし そぼく きやう
真摯素樸の郷となし
われら
我等が使命成し遂げん
しんり ひおうさく
真理の秘奥探る可く
どうぎ ひかりてら
道義の光照す可く

藻岩の緑

(明治四十四年寮歌)

松山茂助君 作歌

柳沢秀雄君 作曲

一

藻岩の緑春蘭けて
万朶一朵の朝霞
憧憬彩と流れては
花皆奇しき香ならずや
若き血潮の踊る時
希望の前途光あり

二

青葉波よるアカシヤの
薫る木影に立ちよれば
長風夏の雲ゆらぎ
秋は牧場の夕まぐれ
鐘声止みて今暫し
牛の背に散る鳶紅葉

三

あはれ「美の国」石狩の
自然を己が揺籃に
おほし立つ可き人皆の
意気紅霓に似たるかな
一撃万里す大鵬の
翼整装ふ思あり

四

斗南の翼拡げては
天地広しと誰か云ふ
雲より高きアンデスの
裾野に友よ羊逐へ
天に漲るアマゾンの
岸辺の森に斧を振れ

五

弦月落ちて白楊の
樹林の暗の深き時
八荒裂けて万籟の
声すさまじく吹雪く時
世の濁流を叱咤して
巨人の叫び茲にあり

六

浮華輕佻の風あれて
驕奢の波は狂ふとも
北斗の光清ければ
世は永久に我世なり
聞けや人々北州に
正気溢るる意気之歌

都ぞ弥生

(明治四十五年寮歌)

横山芳介君 作歌
赤木顕次君 作曲

一

都ぞ弥生の雲紫に
花の香漂ふ宴遊の筵
尽きせぬ奢に濃き紅や
その春暮れては移らふ色の
夢こそ一時青き繁みに
燃えなん我胸想ひを載せて
星影冴かに光れる北を
人の世の清き国ぞとあこがれぬ

二

豊かに稔れる石狩の野に
雁遙々沈みてゆけば
羊群声なく牧舎に帰り
手稲の嶺黄昏こめぬ
雄々しく聳ゆる楡の梢
打振る野分に破壊の葉音の
さやめく蜩に久遠の光り
おごそかに北極星を仰ぐ哉

三

寒月懸れる針葉樹林
櫓の音凍りて物皆寒く
野もせに乱る清白の雪
沈黙の暁霏々として舞ふ
ああその朔風細々として
荒ぶる吹雪の逆巻くを見よ
ああその蒼空梢聯ねて
樹氷咲く壮麗の地をここに見よ

四

牧場の若草陽炎燃えて
森には桂の新緑萌し
雲ゆく雲雀に延齡草の
真白の花影さゆらぎて立つ
今こそ溢れぬ清和の陽光
小河の濤をさまよひゆけば
うつくしからずや咲く水芭蕉
春の日のこの北の国幸多し

五

朝雲流れて金色に照り
平原果てなき東の際
連なる山脈玲瓏として
今しも輝く紫紺の雪に
自然の藝術を懷みつ
高鳴る血潮のほとばしりもて
貴とき野心の訓へ培ひ
榮え行く我等が寮を誇らずや

幾世幾年

(大正二年寮歌)

木原均君 作歌

柳沢秀雄君 作曲

一

幾世幾年流れけん
永劫隔つ後までも
洋々声なく野をこえて
銀河に似たる石狩の
岸辺静けき夕まぐれ
導く星を仰がずや

二

巷の塵の跡を絶ち
惰眠をさます雪嵐
毘嵐万里をかけりては
天地もゆらぐさまじさ
万象淋しく装ひて
蕭々寒き冬景色

三

めぐる月日の尾車や
さざめく小河春告げぬ
あはれ幸ある北の国
緑が丘に打ち臥して
薫る微風身にうけて
常世の春を偲べかし

四

清き真理の渚より
無窮を照らす最高の
天つ光明を探り得て
迷ひの羈絆解きほどき
闇を排して永遠の
理想の郷を拓く可し

五

一百意気みつ北蝦夷の
健児よいざや奪ひ起て
白き朔風われにあり
曠野に練へし心身も
歌へ壮なる勝歌を
島根に高く勇ましく

我が運命こそ

(大正三年寮歌)

樋口桜五君 作歌
赤木顕次君 作曲

一

我が運命こそ青澗わける
千ひろの海の真珠取り
美想にあこがるる身は
驕楽の春に酔ひしれて
戯る人を夢とはみつつ
逆まく波を聞きゆく

二

永遠に華さく水底ふかく
神秘の巖に嫦娥の
露のしづくの真珠またま
掌に獲し光栄と喜悦と
七重の潮の妙音にひびく
美珠こそわれの生命なれ

三

薫る樹陰に花灰みえて
朧おぼろの春の宵
一壺の酒の汲む夢淡く
心の酔に舞歌を
社会高くしらべ祝はむ
君瑞祥の歳なれや

四

彩雲低く恵の家に
幸漂蕩ひてゆく水や
姿うるほす柳の萌黄
契りゆかしき春鳥の
団欒の音をばうつし伝へむ
遠くはるけき師の君に

時轍乾坤に

(大正四年寮歌)

沢田退蔵君 作歌・作曲

一

時轍乾坤に回り来て
陽春駘蕩のおぼろよひ
紫淡く霞罩め
自治の流れは永遠に
若葉の陰を浮べつつ
吾等が幸を祝ふらん

二

胡馬北風に嘶きて
越鳥南枝に巢を造る
世の濁江に逆へる
棹歌の声の勇ましき
三星霜の春のおきふしに
深き感慨のなからめや

三

柴扉を出でて霜を踏み
川流を掬ひ薪樵る
崇き希望の若人が
歓喜憂苦を共にせし
友悌凋まぬ松柏と
幾千代かけて変らざれ

四

彼の邯鄲の仮枕
栄華の夢も半にて
世の秋風に驚かん
目ざす真理の高殿は
遠く遙けし突進めいざ
心の駒に鞭打ちて

五

ウラルの彼方風凄く
陣雲くらき八街は
鉄騎百万駆りつつ
正義の光失する時
燃ゆる義憤を胸に秘め
起て自治寮の健男児

六

自由の旗を振り翳し
平和の楯を掻き列ね
吾等起つべき時は来ぬ
見よや獅子王一吼して
曠野虎狼の影もなし
祝へ今宵の記念祭

穹蒼高く

(大正五年南寮寮歌)

長崎次郎君 作歌

黒住須賀夫君 作曲

一

穹蒼高く夜は深く

沈黙の森に聳えたつ

桂の梢指すところ

北斗の冴に君見すや

「吾が若人よ汝が野心

われにかも似て崇くあれ」

二

荒ぶ吹雪のもだすとき

六片の花咲くところ

咬たる天地塵絶えて

塞つる力を君よ知れ

「吾が若人よ北の曠野に

身を練り魂を磨かずや」

三

谷間の百合の香のゆらぎ

楡の若葉に陽はこぼる

春の息吹に渡り行く

時鐘の響に君よ聴け

「吾が若人よ石狩は

自由の郷土ぞ幸多き」

四

百鳥歌ひ花は笑む

美しき国の自治の家に

十一の春今日来る

祝歌たかく君歌へ

「迪に恵ふ若人の

住家よ永に栄あれ」

五

崇きのぞみを星に懸け

鐘に自由を学びつつ

真理を求むる一百の

健児が行手遠けれど

吾若き力強ければ

羸む秋は近からむ

など羸ざる事あらん

荒潮繞る

(大正五年北寮寮歌)

桜井芳次郎君 作歌

橋本吉郎君 作曲

一

荒潮繞る北の郷
絢爛の時に高く
看よ極光に照らされて
夢にまどろむ春の精

二

嗚呼感激の経宮を
矜る血潮に求め来て
十一の年の旦暮は
澄明の府靈清し

三

夏の日悠然に石狩の
浩蕩の水焔めきて
流光高く際涯なき
自然の業を畏れずや

四

夕暮呼ばふ閑古鳥
冥想ここに始めよと
遠鳴くなべも紅葉しつ
稜暈として唐錦

五

北風胡沙に雪を捲き
荒れ狂ひたる戦場の跡
暮れ行く蜚霧に包まれて
白銀の都今静か

六

清けき永久の靈泉の
至福の水を掬ふ可く
黄金の甕守りつつ
調新しく唱はなん

七

智慧の光に導かれ
熱の磅礴に生立ちて
潔き生活の道すがら
曲勇ましく唱はなむ

魔神の呪

(大正六年寮歌)

佐藤惣之助君 作歌

植村泰二君 作曲

一

魔神まじんの呪のろひアルペンの
白雪はくせつ永久とほに清きよからず
見よ永劫えいこくと誓ちかひけん
平和へいわの春はるは短みじくて
吹く凋落てうらくの秋風あきかぜに
正義せいぎの光影ひかりかげくらし

二

されど儼然げんぜん東洋とうやうに
その義ぎと俠けふを胸むねにして
燦さんたる北斗ほくと北陸ほくろくの
強きやうと仰あふがれ誇こりつつ
自治じちを精神いのちの我窠わがれうは
映華はえある歴史れきし十二年じふにねん

三

嗚呼ああ北海ほくかいの荒吹雪あらふぶき
白箭はくせん膚はだを擘つんざくも
胸むねの狂瀾きやうらん青春せいしゆんの
血潮ちしほに如何いかで比ひすべきぞ
力ちからの緒琴を高鳴ごうなりて
紅燃くれなゐゆる悶もだえあり

四

残陽ざんやう西にしに茜あかねして
今日けふも暮くれれ行く手稲山ていねやま
雲くもの五彩ごさいを眺ながめては
思おもひは遠へうく渺茫ぼうの
彼の海かを越こえ山やまを越こえ
雄図ゆうと千里せんりぞ駈はしりゆく

五

平和へいわの流れ豊平とよひらの
狭霧さぎり罩こめたる朝あさぼらけ
東とう指さして流れ行く
淙々そうそうの音を我聴われきけ
瀬々せせの河波かはなみ声こえあげて
唄うたふ「自由じゆう」の二字にじの曲きよく

六

今宵こよひ榆影ゆえいに団欒まじあひして
月影つきかげに酌しやくむ自治じちの宴えん
廻めぐる盃さかづき夜よも更ふけて
北斗ほくと傾かたぶく玻璃はりの窓まど
いざ吾わが友ともよ熟睡うまひせむ
明日あすは人生じんせいの旅たびなれば

花を褥

(大正七年寮歌)

松本五六君 作歌
峰秀雄君 作曲

一

花を褥の草枕
霞に暮るる野辺の春
ローマの晨ナイルの夕べ
栄華よあはれ夢の跡
傾く月に猶心せず
驕奢に酔ひし人々の
惰睡を破る雄叫や
健児義を取る北の国

二

世の敗類に神怒り
南の洋に濤さわぎ
腥風荒さび天日暗く
欧亜の文華影消えぬ
堯舜去りて妖雲霽れず
江河汜濫れて未濁る
暴虐無道幾年ぞ
吾等立つべき時ぞ今

三

煙霞曠しき石狩の
荒野に立ちて嘯けは
霜枯れ吹雪く原始の森に
エルゼの歌も微かなり
手稲の嶺に夕陽淡く
宇宙の神秘畏れみて
雄々しき自然に育まれ
雲呼び沖天に翼搏たん

四

春の女神の訪れに
花は綻び鳥謡ひ
翠の樹蔭に鈴蘭香り
露の涼しき夏の朝
時雨に漂ふ牧場の紅葉
白雪晴るる冬の景
書読む歳は豊平の
時の流れに恵あり

五

薫る春風アカシヤの
情操床しき若人が
崇き希望の象徴と仰ぐ
聖き北斗の瞬に
真理の道の暗示を索め
純しき玉の緒一百を
一つに懸けて結びたる
自治の基礎動きなし

六

烏兎流光の移ろひて
昔の友は在はさねど
十三年の光栄ある歴史
護り伝へて極限無し
自由の大旗正義の剣
天下の民を済ふべし
戦いの場の首途とて
宴の盃いざ汲まん

暗雲低く

(大正八年寮歌)

熊谷巖君 作歌

置塩奇君 作曲

一

暗雲低く乱れてし
怨嗟の声の収まるや
逆巻く波も和み来て
星影淡き東雲に
平和の光朗々と
碧緑の海に輝きぬ

二

さあれ意へば泰平が
やがて醸さん痴情の夢
人は安佚を偷むとも
我には固き自覚あり
人は驕奢に酔ひしるも
我には尚武の気魄あり

三

夢深かりし曙の
霞にまがふ蝦夷が野に
礎固く営みて
巍峨とそそれる自由の城
浮世の塵を低く睥て
健児の意気を養はん

四

孤城に春の訪れて
榆樹の匂まだしくも
北斗の光燦として
崇き黙示を与ふらん
雪の色にもたぐふべき
潔き節操を思はずや

五

永遠に変わぬ希望もて
理想の華を咲かせんと
険しき世路に逆ひつづ
歩み運びし先進が
光榮の歴史を偲ぶれば
思出多き十四年

六

いざや勝利の盃を
平和の女神に捧げつつ
右手に正義の剣を執り
左手に自由の楯を持し
若き血潮の鳴るがまま
祝ひ謳はん記念祭

無窮の空に

(大正九年寮歌)

戸田早苗君 作歌
藤田篤君 作曲

一

無窮むきゆうの空そらに黎明れいめいの
崇高ただかき姿すがた天翔あまかけり
新あたしき日ひは来きたれりと
万象ばんしやうの歓声こゑひびく哉かな

二

自由じゆうの陽光ひかりかぐはしき
美花はなさく学園そのに集つふとき
青春せいしゆんの日ひにゆるされし
尊たふときたから失うしなはじ

三

強つよき響ひびきの底深そこみかく
みなぎる大地だいち踏みしめて
虚偽いつはりの世よを破やぶらんと
燃もえたちさかる我わが力ちから

四

生いくる喜悅よろこび讀たへつ
深紅くれなゐの幻影かげくる狂くるひては
陽炎かげろふゆらぐ野のに出いでて
心こころのかぎり歌うたひ舞まふ

五

人ひとのいのちの際涯はてしなき
暗くらき疑惑まじひを我胸わがむねに
夕楡影ゆふべこかげに佇たたずめば
北斗ほくとは高たかく輝かがやけり

六

真理まことの宮殿みやの灯ともを
憧憬あこがれ仰あふぐ友ともどちが
語かたらひつきぬ感激かんげきに
吹雪叫かぜさけぶ夜よの更ふけゆくを

七

三年みとせの夢ゆめは淡あはくとも
長ながき旅路たびちのみちすがら
神秘くしひの森もりに迷まよひ入いる
尚たかき生命いのちと君知きみしるや

生命の争闘

(大正十年寮歌)

青野正男君 作歌

小峰三千男君 作曲

一

生命の争闘敗れじと
雪解の野辺に萌え出でし
浅緑なる若草の
伸展ゆく生命思ふとき
若き力のよろこびは
我等が胸に溢るなり

二

悲哀誘ふ郭公の
声を聞きつつ逍遙へば
今は小暗き木下闇
黒百合咲けど春いづこ
うつろひやすき若き日を
盧生の夢となすなかれ

三

牧場に虫の音も淡く
仰げば高し秋の空
肥馬原頭に嘶きて
雄渾の気はあふれつつ
崇き理想を胸にして
生くる喜悅謳ふ哉

四

眺めはてなき石狩の
曠野に凋落の秋更けて
寂しく暮るる手稲山
今うすれゆく赤陽に
想ひぞ馳する北欧州
戦禍の跡の夕まぐれ

五

夕吹く風膚にしみ
音も淋しく行く櫓の
大雪原に消ゆるとき
寒月高く冴ゆる夜半
哀愁をこむる若人の
瞑想ぞ如何に深からん

六

嗚呼北州の春秋に
自然の教訓学びつつ
尚き生命に生きなんと
精神を磨く友どちよ
先人建てし自治寮の
貴き歴史伝へかし

起伏しらぬ

(大正十一年寢歌)

牧原東洋男君 作歌

高橋北雄君 作曲

一

起伏^{おきふし}知らぬ運命^{さだめ}こそ
時の流転^{るとん}の弧^この上^{うえ}を
あはれ雪解^{ゆきげ}のましみづに
流^{なが}れて尽^つきぬ濁流^{なぐりう}よ

二

未知^{みち}のひろ野^ののかぎろひて
輝^{かがや}くまでに萌^もえ出^いでし
若^{わか}き草木^{くさき}のさゆらぎに
春^{はる}深^{ふか}き日^ひの逍遙^{さすらい}や

三

澄^すみて雲^{くも}なき空^{そら}と野^のを
かぎりて走^{はし}る山並^{やまなみ}に
高^{たか}き心^{こころ}のをのきは
躍^{おど}る血潮^{ちしほ}の真夏^{まなつ}日陽^ひよ

四

銀^{ぎん}の香炉^{かうろ}にしのび雨^{あめ}
楡^{いれ}の繁^{しげ}みに交^{まじ}らへば
大^{おほ}天地^{あめつち}も傾^{かたむ}きて
命^{いのち}かなしき秋^{あき}なれや

五

夜^よ毎^{ごと}にさゆる窓^{まど}の星^{ほし}
闇^{やみ}行^ゆく櫓^{そり}の鈴^{すず}の音^{おと}に
真^ま理^{こと}の水^{みづ}の人^{ひと}掬^{むす}ひ
求^{もと}めてやまぬ瞑想^{めいさう}よ

六

深^{ふか}き安^い息^{こひ}の夢^{ゆめ}やすく
げに憧^{あこが}憬^れの地^ちやここに
芸^{たくみ}術^{れい}の霊^{れい}ぞただよへる
自^じ由^{いう}の精^{せい}ぞみなぎれる

かがやく路

(大正十一年新寮記念寮歌)

—— 新築された寮のために ——

服部光平君 作歌
山本吉之助君 作曲

一

かがやく路のさすらひや
魂の聖なる石狩の
色華かなるあけぼのの
揺籃に歌ふ若人は

二

夏の林に流れわたる
いのちの野火のおき伏の
愛の栄えは香盤に
感激ふかく胸をゆる

三

秋の狭霧の野を越えて
時の進みのみちすちに
鐘の音聞けば今更に
あはれ高鳴る吾生命よ

四

永遠になみうつ白銀の
神秘を語る冬の夜に
空色の国星の国
沈黙に曳ける追懷よ

春雨に濡る

(大正十二年寮歌)

高橋北雄君 作歌
西田貫道君 作曲

一

春雨に濡るアカシヤ花
街路の灯はなやかに
地は銀鼠にたそがるる
寂かに歩む若人が
心にめざむ爽かの
瀧み充てる力かな

二

夏の入陽に砂丘の
狍虎の骨に鷗飛ぶ
融けざる銀の山脈は
碧薄れゆく空にうく
名残の光身にあびて
異郷の方を思ふかな

三

灰青白き白樺や
落葉ふむ音寂しくも
谷また谷を辿り行き
今宵は淡き夢見んと
焚火を囲み歌ふ寮歌
紫紺の闇に解けて行く

四

青き空透き銀の月
石狩の河波光る
雪の野限は靄こめて
灯漂ふアイヌ小屋
琥珀の酒を汲み交し
王者の誇偲ぶかな

茫々はるか

(大正十三年寮歌)

高野芳雄君 作歌
神島辰雄君 作曲

一

茫々はるかに緑に炎えて
石狩原頭美の香に酔えば
高鳴りあふるる若人の血や
ああこの霊の憧れの地に
曙光に輝く黎明告ぐる
鐘を撞かばや

二

真紅に熱せる入陽は沈み
黙思の歩みを運ぶ夕宵は
エルムの繁みの梢透かして
夕映流るる黄色の彩に
生命の窓をば疾く開け放ち
霊気吸はずや

三

地平の際涯によしや吾等の
感激は沈めど彼方はるかに
思索の曠野は尽せぬなれば
石狩河岸に友よ佇み
野生の律べの秘奥を求め
真理を聴かん

四

寒風荒びて吹雪吹く夜も
榆林に洩れたる四寮の燭光
生命ぞまたたき青春の日の
灯累りて永遠に輝く
ああ其の灯かげに霊と血潮の
籠められしかな

五

昔を偲べば吾等が寮は
原始の茂森に生める自然児
不断の船路に彼岸めがけて
自治への歩みは十九星霜
自由の栄に友よ奏でん
平和の序曲

敝れし衣

(大正十四年寮歌)

外山徳次郎君 作歌

三溝清美君 作曲

一

敝れし衣の袖に散る
不香の花の小夜嵐
淋しく強く生きぬ可く
手稻の峯に響くかな

二

送る梅花の芳せに
熱腸しほる杜鵑
誘ふ春風恨みては
散るも惜しまぬ山桜

三

きのふぞ移る秋風に
草木悲歌を奏ひつつ
月の面ゆく鳥の影
故山の空に微み行く

四

駄鞭荒野に打ふりて
赴くや皇土の城の外
青山我が有に帰し
緑水我を弔はん

五

国に誓ひし丈夫の
夢中原にさまよひて
仰ぐみ空にまたたける
北極星のかげ清し

大地はなごやかに

(大正十四年開舎二十周年記念竊歌)

黒沢徹君 作歌

三溝清美君 作曲

一

大地はなごやかにうるほひて
丘陵の傾斜の若草や
さゆらぐ楡の嫩葉にも
春新生の精気は溢る
原始林の緑に流れ来る
嗚呼青春の讃歌

二

色紫の彩絹に
染めて溶けたる朝霧の
悠久の蒼穹はるかにも
濃き水色にうつろへば
白鳥高く海に飛び
入江の波に夏陽は映ゆる

三

連嶺紅に黄昏れて
夕靄流る水沼の
白き葦穂波に顫ふ月
幽暗の草野に訪れば
仄かに響く胸うち
高遠き感激に逍遙ふ哉

四

神秘の森林に群星さえて
雪の曠野遠く静謐なり
銀壺にゆるる灯に
崇き教訓を胸にして
心の憧憬郷にまどゐする
若き人等の哀歓よ

五

陽炎ゆらぐ春の日に
落葉しぐる秋の夜に
胸に高鳴る青春の
若き誇りを歌ひつつ
限れる生の瞬時を
深き瞑想到過ぎずや

ああ青春の歡喜を

(大正十五年寮歌)

木村左京君 作歌
牧野千代治君 作曲

一

ああ青春の歡喜を
宴の酔ひと言ふは誰れ
我が行く方の遠ければ
しばしこの舎に憩ひして
草を茵の旅枕
明日の旅路を夢に見ん

二

曠野に萌ゆる若草の
しらべゆかしき喜びを
そよ吹く風に寄するとき
うららかに照る春の日は
霞の奥にまどろみて
光の波は野に充てり

三

故郷の空は見えねども
ただ野は広く路遠し
彼方の国に孜々として
歩みつづくる行人は
行手の空に湧き出づる
光の雲を如何に見る

四

望の光見えざれば
世は永劫に常闇か
我が清純の魂の
撓まぬ旅は麗しく
頑迷の徒も起き出でて
我等の群に加はらん

五

あはれゆかしき人の世や
夜ふけの街を歩みつづ
遠き北斗の星を呼び
友も歌へば我も和し
来るはここぞ森の奥
光まばゆき自治の燈

爪紅の黎明の風

(大正十五年開学五十周年記念寮歌)

井上哲郎君 作歌
河口忠雄君 作曲

一

爪紅の黎明の風
白羽簾へる若武者が
青春うち慕ふ風情あり
赤き血潮の溢れては
北溟の城花も散る
香ふ二十を愛しむ哉

二

いとすら若き鰯を
逆巻く潮に浮べつつ
宿命の羈絆解きうてば
無量無限の陽光に
真白き鳥のゆく如く
北海の奥の流離よ

三

ああ黒潮や、さざれ床
いるかの夢に身をひそめ
郷愁空に盃もなく
熱ある友を求めては
溢るる涙袖うちて
吾等が寮歌を含むなり

四

淡紅の花陰に
裸形の友も集ひして
生くる力の征矢ひけば
牧羊神も醒めつらむ
孤雲の彼方はるけくも
胸うちふるふ希望あり

五

されど悲恋の跼蹐は
浩蕩雲にむせびけむ
断腸を撞かむ巨鐘の
鐘樓の夢やいかなれば
嘆かひ濡るる月魄に
秘めにし曲をつたへずや

六

嗟呼青雲を吟じなば
月毛の駒に星止めむ
秋水義に反きては
破波の想堪へがたく
酒盃にむせぶ白雲の
乱るる醉歌に恨みあり

七

大熊星のさすほとり
快樂の濁舟ひくく見て
舞ひつ歌ひつ白羊の
あこがれ楡の駅路に
自由の泉青春を
うち連れ汲まん誇り哉

蒼空高く翔らむと

(昭和二年寮歌)

土井恒喜君 作歌
長谷川吉郎君 作曲

一

蒼空高く翔らむと
暫しやすらふ楡の蔭
力は胸に溢れつつ
翼つくろふ思かな

四

若きに芽ぐむ数々の
深き苦悩は身にあれど
迪を恵ねて辿りゆく
遊子の真意君知るや

七

花咲き散りて五十年
寮庭の桂も年ふりぬ
先人の影とほけれど
遺訓や永久に薫るらん

二

朝曠野の露を吸ひ
夕北斗の曙きに
驚き睦る幼鵬の
清き眸君見ずや

五

茫々千里石狩の
野は澄みわたる銀の
雪さんらんと散るところ
われらが魂の故郷かな

八

北溟城の生活に
桜と星の旗かざし
相寄りむすぶ三百の
志は高きわれらかな

十

ああ碧落に永劫の
北斗の光かげさえて
清き三年の思出の
銀觴の酒つきざらん

三

うら若き日の悦びを
はかなきものと誰かいふ
理想の潮湧き出づる
生命の海の高鳴るを

六

若き勇者よオキクルミ
熊をはふりて饗宴せし
短檠すでに光消え
東の空はかぎろひぬ

九

こよひ手稲に日は落ちて
新月細くかがやけば
青き煙のそが中に
ほがらかななる楡の鐘

郭公の声に

(昭和三年寮歌)

古河勝夫君 作歌
宮本正治君 作曲

一

郭公の声に迷夢の夜は明けて
紫紺の雲の色も褪めゆき
春芝草に風のそよげば
旭光は見よ東雲の沈黙を破り
自然の精姿紅に揺らぎぬ
讃へなんうら若き日の
朝の神秘を

二

濃緑に原始の森の茂る候
君影草の花も散り果て
クローバの上に胡蝶舞ひ舞ふ
蒼空の小鳥を追ふか陽炎立ちて
牧場に悠き牛の声聞く
仰臥せる牧童の上に雲は動かず

三

俊巖の秋気何時しか野に充ちて
可憐し虫の音ものを思はず
移ろふ自然の色彩賑はへど
沁々と人の運命の秋も偲ばれ
淋しき哀愁に涙にじみて
蕭々の夕風いとど身には悩し

四

銀月は今雪原の上に照り
エルムの梢淡青く映りて
野末に籠むる夢の狭霧の
奥深く幻想の燈火の明滅を見る
凍らんとする靈気かすかに
一条の櫓路に残る鈴に震へり

五

丈なせる草踏み分けて蝦夷ケ野に
迪を恵ねし人の姿よ
さ迷ひ暮れて星仰ぎけん
ああそこに原始の影は更に薄れて
老いし楡に嵐荒涼びつ
夕陽は手稻の背淡紅く映せり

六

白樺よポプラ並木よアカシヤよ
春秋三度廻り去りなば
若き生命は疾くに萎え果て
逝にし日の宴遊の宵の
夢も追ひ得じ
此の経営に思想分ちし
寮友よ心の記念永久に謳はん

黒潮鳴れる

(昭和四年寮歌)

須田政美君 作歌
森忠文君 作曲

一

黒潮鳴れる滄海越えて
際限無き春を北州に訪ふ
原始の大森に八光揺ぎ
若草の曠野に羊群遊ぶ

二

情懷は臘月に仄かに薫る
アカシヤの白花慕ひて歩む
恋ふる往昔の静寂けき名残り
古塔にひびく懐しき鐘

三

紅光うすくエルムに映えて
草笛かそかに牧場になる
漂泊らひ行ける白雲影仰ぎ
無心の若人らは緑に臥せり

四

果無き憧憬銀河に寄せて
玻璃永劫の清き夜空を
神秘の皓翼声なく衝ちつ
我等が高夢は流れゆくかな

五

淋しき風声に銀雪は乱れつ
大空鳴りて渾瞑く暮れゆく
燦めく灯影常春の謳歌
血潮と共に尚湧き立てり

六

久遠の絢夢はうづもれゆきて
哀愁時にしづかに来れど
雄き「自然」と「血潮」の人は
榆陵に永くうつくしく立つ

嗚呼青春の

(昭和五年寮歌)

児山信蔵君 作歌

有村徹君 作曲

一

嗚呼青春の夢高く

理想のあとに憧憬れて

楡の花散る学都にぞ

啓示を求む若人は

綺花を流して逝く水に

十九の春を嘆くなり

二

牧場の緑草踏みしだき

栗毛の駒に鞍置きて

うち振る鞭の音も高く

希望の天空を朗らかに

寮歌を歌ひつ眺むれば

白雲流れゆく手稲山静か

三

学堂の古鐘の沈みゆき

楡陵の蒼空に銀月冴えて

羊の群の片影もなし

沈黙の原始林に散りしける

落葉踏みゆく雄き子は

三年の絢夢に涙する

四

疎林のほとり夕陽は落ちて

閑さへも絶えし真夜に

涯なく白き石狩の

銀雪に連なる曠野の静寂

震はせ乍ら橈唄は

神秘の闇を縫ひてゆく

五

北斗は遠く七星清し

「妄執」の現世を見下して

真実一路の迪恵ぬ

「意気」と「血潮」に生くる子の

瞳に燃ゆる紅焰は

永遠なる生命の証なり

平和の光輝ける (昭和六年寮歌)

広瀬英三君 作歌
金景洙君 作曲

一

平和の光輝ける
春まだ浅き曙に
綾なす紫雲を分け出でて
彩色られ行く青春の
久遠の迷夢を求めつつ
声高らかに歌はなん

二

陽光燦然乱れ入る
夏の窓辺に書よめば
寮庭に年経るアカシヤの
床しき薫香漂ひて
いつか心懐の極みなく
蝦夷の昔にいたる哉

三

秋も闌け行く北溟の州
白楊の華乱れとぶ
聖き都に寂寥の
静かに迫る此の夕べ
思索の迫を恵ぬれば
榆林に鐘はなり響く

四

馬櫓の鈴の音も絶えし
雪の大路を歩みつつ
声をかぎりに寮歌うたふ
凍れるものみな揺かして
星斗は高く冴ゆる夜の
大空のかなたへ消えて行く

五

高き「理想」と「純情」に
たぎる生命を託しつつ
憧れ集ふ若人の
情熱のかがり火打ち囲み
月下に酌むや愉の宴
いざや謳歌へん記念祭

別離の歌

(昭和六年閉寮記念寮歌)

大槻均君 作歌

中村小弥太君 作曲

草木すら時に悲歌を嘆ず、永劫の時の流れの尽きざるに、
人の世の凡ての何ぞはかなき。
懐しき友よ、
彼の寮を思ひ浮べて心静かに「別離の歌」を奏でん。

一

高遠を誇る自治寮よ
星永遠に流れては
春秋ここに二十六
逝きて帰らぬ春風を
恨む今宵の若草の上
これ先人が夢の跡かな

二

移ろふ世習泣くは誰そ
原始の森に咲く枝を
手折りて結ぶ友垣が
燃ゆる生命のかがり火に
光る瞳は幸福星か
強く正しく友よ生きなむ

三

明日の宿居は知らねども
吾に友あり、吾強し
降る苦難をともにせん
誓ふ心の酒杯に
尽きぬ名残の涙する
今宵限りのこの宴かな

古城の春は

(昭和七年寮歌)

大槻均君 作歌

中村小弥太君 作曲

一

古城の春は老い易く
延齡草の名に問へど
流転の法は断ち難し
友よエルムの鐘を聴け
再建の秋程なけん
ペルアスペラと鳴り響く

二

今移り来し原始林の蔭
宿るは未だ浅けれど
契は深き二百の
心を交はすこの宴
暁かけていざ撞かん
アドアストラの自治の鐘

三

妖雲西に漾へど
視よ落日の悠々と
大地を旋り淪むかな
眠る此の城吾も亦
醒めての生命培はん
四大の荒び明日あれば

四

厳寒凍る極北に
霧立ち騒ぐ曙の
光を担うて起たるとき
際涯もなく寄せ返す
世紀の波濤は狂へども
既倒にかへす力あり

五

竜蛇岸打つ大洋の
今人生の船出かな
白帆高くはためきて
正気をはらむ若人の
理想の船は不壊にして
さかまく苦海を永遠に航く

タンネの氷柱

(昭和八年寮歌)

卜部清君 作歌
白石祐義君 作曲

一

タンネの氷柱消ゆる頃
胡蝶は眠る花の宿
牧場に結ぶ夢遙か
青き希望の雪峯こえて
四海に羽振る若鵬の
石狩を立つ意気をみん

二

朝里の丘に烏頭咲けば
蝦夷が芙蓉の雪とけて
千尋の懸崖ゆくだけ入る
忍路の沖の真白帆に
万里の波濤翔らんと
白鷗はしばし憩ふなり

三

真紅の夕陽山の端に
もゆる紅葉をかざしたる
友がゆくての野を遠く
幌馬車の影消え去りぬ
蓬髪胡風に靡けつつ
懐情は尽きず果てもなく

四

十勝の峰に捲き起こる
吹雪怒りて咆ゆる夜も
旭光東に色めけば
熊追ふ愛奴の雄叫びに
大雪原の靈光や
無絃琴の音ぞ高し

五

懸る垂氷に月くだけ
千々の瞑想は来し方の
六十の秋はしるくして
緑に浮ぶ白亜城
苔むす楡鐘の哀調きけ
若き力を求むなり

津軽の海

(昭和九年寮歌)

星勇君 作歌

白石祐義君 作曲

一

津軽の海渦巻ける奥

オホツクの寒潮咆哮えて
雄健き名ぞ蝦夷が島根に

年古りし恵迪の寮
旅寝とな言ひし三年を
揺籃の高夢を追ふなり

三

清明の水に浮べる
宵月の影はさやけし

酒觴をめぐらしかさね
熊熊の声聞くもすべなし

たぎりゆく若き血潮に
限りなき感激をしたふ

二

寂寥の歩行はこびて

茂みさぶる森に仰臥し
先人の詩になぞらへ

陳腐なる歌を恥ぢらふ
ただ仰げ自然の姿
そは深き黙示をきさむ

四

六十にも齢うつろひ
集ひたる寮友は兄弟

伝統の永遠の記念と
感激の寮史も成りぬ

情懷深く唯魂が
魂と結び輝く

五

恵迪の館を訪ひし
竜田姫佐保神三たび

若人の生命捧げし
想ひ出の自由の宴遊

永劫に若き一日の
夢とせむ榆鐘の調べを

六

黎明は曠野の際涯
雄叫びと共に来れり

満蒙の長夜の闇も
晴れんとす起てよ寮友

青春の象牙の塔を
いざ出でむ時は到れり

七

北溟の自治の牙城を
蒼穹高く巢立つ寮友

澆季の世救はんは汝れ
済世の烽火あぐべし

忘れ得ぬ恵迪の歌
高唱ひゆけ正義の大道を

噫妖雲は

(昭和十年寮歌)

川村真君 作歌
荻野辰夫 作曲

一

噫妖雲は狂へども
迪を恵めし若人等
巍然四寮に立籠もり
覚醒の歌高誦ふかな

二

三年の契浅からず
爛漫春を欺けど
銀觴口辺にうつろへば
名残の春を惜むべし

三

羊の群は去り行きて
角笛遠くこだましぬ
夏草深き丘上に
月三更の影冴ゆる

四

不壊の生命と輝きし
緑葉漸く紅葉して
今玲瓏の谿谷に
若き男の子の寮歌消ゆる

五

颯々の風音寒く
櫓の音孤弦の月を呼ぶ
窓に佇む多感の遊子
今宵何をか思ふらん

六

月影淡き楡の陵
記念の祭終るなり
篝火焚きて我は今
静かに宵を誦はなん

嗚呼茫々の

(昭和十一年寮歌)

穴戸昌夫 作歌
村岡五郎君 作曲

榆陵謳春賦

われらが三年を契る絢爛のその饗宴はげに過ぎ易し。然れども見ずや穹北に
瞬く星斗永久に曇りなく、雲とまがふ万朶の桜花久遠に萎えざるを。
寮友よ徒らに明日の運命を歎かんよりは、榆林に篝火を焚きて、去りては
再び帰らざる若き日の感激を謳歌はん。

三

嗚呼茫々の大曠野
先人ここに芟りて

建てし自由と自治の城

その源は遠くして

濁世叱咤す六十年の

苔むす青史誇りなん

二

老桜の蔭や北辰の下

少時旅寝の若き子が

自治燈かけ聖鐘うちて

惰眠れる魂を覚醒すべく

降魔の剣かざすとき

狂へる魑も声ひそむ

四

ああ感激の美酒は

廻りて早きその三年

希望の光恵めては

榆林にかはす盃に

啓示の翳を泛べつつ

男の子の眸に涙あり

さはれ今宵の我が寮
「人生意気」に集い来し

結びとけぬ友垣が

光明と權威謳ふとき

星屑原始林に輝きて

流転の相を示すなり

魂の故郷

(昭和十二年寮歌)

山崎善陽君 作歌
平城鷹雄君 作曲

一

魂の故郷に立つ

星清き榆の園よ

花芳る三春の夢

感激の涙あふれて

原始林蔭に盃かはす

青春き日の記念の宴

歌ふなり

自治と自由の高き誇を

二

六十年の青史は薫り

郭公の啼声もはるかに

紺青の入相の空

魂は虚空に走せて

住昔の意気を慕ふ

尽きるなき川のせせらぎ

夢ふかし

残春あはきポプラ並木よ

三

いで湯湧く郷の宴は

夜もすがら感激はてなき

絢爛たる瞬間の夢

落葉松の林時雨れて

颯々の悲歌の調べは

榆鐘の響と闇にきえゆく

さびしらに

秋深みゆく静寂の都

四

颯々の暴風おさまり

際涯なき雪の荒野に

皎々と月光冴ゆる

櫓の音の玻窓にこほりて

限りなき瞑想をさそふ

悠久の時の流転

人の世の

悲しき運命ぞ明日の旅路は

五

曠野に高嘯ふ恵迪の健児

毅然たり若き生命よ

先人の崇き訓戒に

大いなる野心育む

慨世の憂はあれど

ここ暫し休息もとめて

いざ寮友よ

のこりの春を惜しまざらめや

春未だ浅き

(昭和十二年第三十回記念祭歌)

平城鷹雄君 作歌
穴戸昌夫君 作曲

一

春未だ浅き白楊の
雪解の小路たたずめば
しばし聞けとて私語の
木の間もれくる夕嵐

二

あはく足げに咲き出でし
おぼろおぼろの水芭蕉
なつかしの原始杜肩とりて
楳火をめぐり歌はなん

三

長髪頬に戯むれて
昔変らぬ風なれや
今したたへん三十回の
青史をかざす記念祭

四

美酒の夜は更け行けど
尽きぬ男子の黒潮を
契の杯に汲み交はし
常縁を祝ふ自治の宴

津軽の滄海の

(昭和十三年寮歌)

二階堂孝一君 作歌

高橋寛君 作曲

一

津軽の滄海の渦潮わけて
雄大き想ひを北斗に馳する
若き情懷は北溟の自然に
抱擁かれて今野心培ふ

二

アカシヤの白花散り敷く夕べ
白銀の月仄かに浮ぶ
牧場添ひの野路逍遙ひゆけば
羊の群は声なく去りぬ

三

石狩の平野に爽夏訪れて
原始の大森は緑影も小暗し
郭公の朗声静寂に徹り
清涼しき朝の熟睡を破る

四

豊穰の秋の讃歌を奏で
ポプラの高梢さやかに揺ぐ
北溟の蒼穹紺碧に透き
生の歡喜我が胸懷に充溢つ

五

飄々の風声疎林に沈潜み
無眼の静寂天地に充滿てり
寒月は鋭利く虚空を截りて
我が行く孤影よ霜に凍りぬ

六

白銀の六華莊嚴に咲く
山嶺奥深く彷徨れ行けば
ああ壮麗の樹氷の森よ
冬の神秘に我が胸戦慄ふ

七

さあれ戦塵東亜を閉鎖し
全支の空に硝煙昏冥し
大陸飛翔る荒鷲想へば
雄心湧きて若き熱血滾る

八

先人の絢夢残れる原始林に
寮祭の犠牲の火柱廻りて
いざ寮友どちよ永久に謳歌はん
意氣と血潮の三年の契り

時潮の流転

(昭和十四年寮歌)

望月真三郎君 作歌

竹村伸一君 作曲

一

時潮じてうの流転ながれそう淙々そうと
四季とき乾坤けんこんに巡りめぐ立つ
去来きよらい常いつねなく人ひと変りかは
有情うじやう無為むゐの時鐘かねの音ねに
孤城こじやうの爽春はるは未だまだ浅しあさ

二

遠くとほ流離りうりの春はるに来て
此この高楼たかどのに春愁うれひつつ
郭公くわくこう鳥とりの鳴くなさへも
多感たかんの児等こちの情懷むね熱くあつ
懷古くわいこの涙溢なみだあふるべし

三

真日まひ澄すむ北きたの蒼穹そらはるか
飛燕ひえんひとたび音おとに鳴なけば
桃李たうりの華影かげは瘦やせゆきて
あはれ旅寝たびねの若きわか遊子ごよ
帰南きなんの郷愁おもひしきりなり

四

夕陽せきやう西にしに落ちお行ゆけば
白樺しらば林はやし朱あけに染しみ
暮秋ぼしうの颯かせは飄々へうへうと
時艱じかんを憂うれふ国くにの子この
悲腸ひちやうの声こゑに似にたるかな

五

北斗ほくとう地平ちへいに揺曳ゆゑぐとき
天地てんちの四大しだい霜しもと凝りこ
四寮しれうの高夢ゆめも凍いてつきて
ほがらほがらの朝あさぼらけ
帰雁きがんの孤影かげよ月つきに飛とぶ

六

明日あす別わかれ行く旅人たびとの
春はるの夕ゆふべの宴遊うたげかな
かへらぬ絢夢ゆめをしのびつつ
生命いのちの故郷さとと慨嘆なげきしも
すでに三星みつとせ霜くさの草枕まくら

弥生の空に

(昭和十五年寮歌)

大井徹夫君 作歌・作曲

一

弥生の空に消え残る
霞に春の絢夢聞けて
前途を祝ふ花吹雪
友情の盃を交しつつ
北斗の光身に享けて
仰ぐ健児の影清し

二

手稻の山に陽は落ちて
広き蒼空の茜雲
「我立たずんば」の意気あれど
昇天の機を小百合咲く
静けき故郷に憩して
暫し臥竜の夢に見む

三

春雨煙る並木路に
輪廻の相俦びては
露置く花を愛しみて
遠き思索に逍遙へば
緑の牧場眼に著き
野路は果てなく黄昏れぬ

四

究理の道は遠くとも
研磨の窓に月匂ふ
白魔曠野に狂ふとも
明日は希望の太陽笑まずや
正義の大道闊歩する
熱血男児ここにあり

五

光かそけき原始林蔭の
月に散り布く花蓆
エルムの精も踊るてふ
記念祭の歌は飴して
永世を寿ぐ篝火に
歓喜の夜は更けゆきぬ

六

不壊の智玉を育みて
恵迪ここに早三年
静寂の楡鐘に眼をやれば
見よ東雲は輝けり
いざ船出せむ波濤越えて
嗚呼人生の朝ぼらけ

湖に星の散るなり

(昭和十六年寮歌)

切替辰哉君 作歌
岡田和雄君 作曲

一

湖に星の散るなり幽けさよ松の火燃えて
漕ぎ出づる愛奴の漁舟の岸辺佇ち沁々眺む
旅の日ははや暮れゆきぬ夢に酔ひ夢にぞ歎かん
汚れなき心を慕ふ大いなる支笏の湖よ
花若く我汝が許に希望満ち今宵宿らん

二

轟けるかの雄叫びよ創造の歷程一路
新しき使命に捧ぐ幸の今日にしあれば
忍苦して欣求むるところ得べくして得べからざりし
秀麗はしきまことの道ぞ近くして遙かなる哉
若き世の秩序を背負ふ洋々の日と俱にゆかなむ

三

乾坤に伏し祈るなり栄光あれ祖国の生命
決意する光眩ゆく手に取りぬ楡の嫩葉
葉脈の強きを讃ふ草々のたふれ生れて
春青み辛夷咲くなり逍遙の原始林蔭清く
暢び行かん我が民族の逞しき息吹き感じぬ

四

立て歩め光の中を国民の重き責任負ひ
燦めきの星辰は語らひ微香る大地囁きぬ
甦生へる征覇のいくさ祝歌ふ吾等が双頬に
失はじ高きが矜持護り来し伝統の法火
淨らかに燃え熾る刻継ぎ行かな来ん若人に

春来にけらし

(昭和十七年寮歌)

橋爪秀雄君 作歌
李子一雄君 作曲

一

春来はるきにけらし白雪しらゆきの
厚あつき衣ころもや重おもからん
綾羅りょうらの糸いとも綻ほこるびて
朧々ろうろう深ふかき五月さつき闇やみ
榆影ゆえい揺ゆめく鼙鼓へいこの音ねに
夜霧よぎりに蒸むせる緑酒りよくしゅ汲くみ
挙こぞりて踊おどる榆にれの精せい

二

草茅さうぼうしげき原始林もかげに
聖きよき焰ほのを囲かこみつつ
若わかき情熱こころは求もとむれど
人生じんせい誰たれかよく解とかん
ただ真まことなる愛あいに泣なく
寮友すがたの姿きよの清きよければ
春宵しゅんせうの罪つみと誰たれか言いふ

三

春秋はるあき糸いとも限かぎりなく
文月ふづきの夢ゆめは織女星おりひめの
あはれ手榴ていねの衣ころもかな
山の端やま深はふかくたそがれて
今宵こよひ銀河ぎんがの祭日まつりびの
永劫えいこくの空そらを眺ながむれば
天空てんくう流ながる星ほし一つ

四

雨月うげつの濁流ながれたう滔たう々と
豊川ほうせんに聞きく世よの憂うれひ
泥濘でいらう沈しずみ真清水ましみづの
流ながる秋ときは見みざるとも
墳墓ふんぼの土つちを清きよくせん
戦いくさの庭にはを高たからかに
七ななつの海うみの潮音てうおんよ

あますなく拓きゆく道

(昭和十七年大東亜戦争頌歌)

切替辰哉君 作歌
池田政晴君 作曲

一

あますなく拓きゆく道
天雲の向伏す極み
地の涯ゆ、征かむ御楯と
大詔もち、我等日の族
源泉のごと湧きたたむ
誇らかに諸声に
血潮流さむ

三

どよめきぬ祖霊の行
六合に頸く漲ぎり
天津日は紅燃ゆる
南方圏の洋路遙けく
秀麗しき創成の神意
重く負ふに務めして
生命たぎちむ

五

帰るなき発程に起つ
眸澄める我等若人
皇国の道に挺身まん
諸共に雄叫びすれば
叫び和す新潮の声
抒情清か、白鳥の
海図に夢む

七

ここぞ茲、いかで忘れむ
日に若き、恵迪の児よ
たどり得し道の感喜
溢れつつ、ほの認めけむ
仰ぎ見る銀漢のほとり
真実もて、弥生ひに
継ぎて行かなむ

二

悠久の天詔琴
今ぞ時、轟き赴きぬ
高光り剣を植ゑて
荒魂の魂にぞ生きむ
遷るべく遷る亜細亜の
峻しかる大いなる
秋に生れし

四

欣る宇宙蝕変満つも
東亜の空、復円光らん
斯くせずばやまぬ宿命と
十億の健剛を禱みて
国挙り歩みゆくなり
熱涙もて仰がなむ
黎明の幸星

六

厳かの時の流れに
新しき力よ躍れ
鮮けき翳りの中に
新しき叫よ挙がれ
胸臆朗ら、身を透けて佇つ
揺ぎなく、鍛へして
先駆に埋めん

天地の奥に

(昭和十八年竊歌)

橋爪秀雄君 作歌

池田政晴君 作曲

一

天地の奥に征く吾や
孤杖無限に旅立ちて
溪巒はるか訪ね来し
榆陵の宿や三春の
旅にしあれどそは深き
噫魂のふるさとか

二

四大も夢む幌のさと
歌の心を温めれば
穠り床しきアカシヤの
花灰白き憂あり
夏宵の霞霰びきて
月皎々の滄海をゆく

三

大空風に咽ぶよひ
暮鐘は低く漂ひて
荒野は凋落の悲歌に泣く
栄枯は移る秋の日の
秋思の歩み運ぶ夜半
久遠の星を仰がずや

四

高き理想は人の世を
人の世と生く佗しさに
坤球鳴りて吹雪き狂ふ
孤高の峯に伏する今
浮生の夢は消え果てて
心虚しき歡喜よ

五

北溟春は浅けれど
森かげ清く黄花咲き
雲雀は高く空に入り
新生の合唱野に満てり
古衣を重ねる日は逝いて
時乾坤に春よ立つ

六

いざ浩歌はなん天壤の
栄ゆる時ぞ益荒男の
事ふる道は烈しかる
今宵祭の聖き火に
尊き誓ひ立てよかし
興亡分るる秋なれば

雪解の榆陵の

(昭和十九年寮歌)

鈴木信夫 作歌
竹山賢治君 作曲

一

雪解の榆陵の一流や
岸辺に憩ふ水鳥の
孤影ぞしばし春の水
面ああ石狩の天空
晴れて轟け謳ふ恵
迪の児等が生命や
聖からん

二

歡喜憂苦を共にせむ
結ぶ契の盃に
松の枝漏るる月影や
人生意気に感じてか
集ひし雁の行く手
稲青雲の峯巍峨の峯

三

いざや伝統の聖火を
翳し先人の絢夢
偲びつつ寮祭の庭に
四十回の春風
頬涙を乾すなれば
散りゆく夜迷雲の
かげ消えて声を
限りの感激かな

四

南の海の有明に
燦く星辰の消え果てて
散りぬる若桜もあるぞ
かしいかで我等の蹶起
ざらん義憤が胸に
ほのぼのと染め映えに
しか朝日影

五

噫世は変遷り人変り
館の原始林は愁へども
剛毅の大旆仰ぎてし
熱血燃ゆる益良夫が
皇国の道に挺身まんと
誓ひし眸に光輝あれ

生命の旅路

(昭和二十年竊歌)

幸坂彪君 作歌

新井忠雄君 作曲

——輝かしき前途のときに——

一

流転永世の旅衣

四大の神秘尋はんにも

若き生命の寂寥に

遠き真理の暁星一つ

起伏知らに慕ひゆく

孤影簫々の荒野に消えぬ

二

清き友情を先人の

忍苦染み映ゆ楡が枝に

懸けて団欒す一刻の

玻璃が盃の面茜雲漂蕩ぎ

胸琴触れ合唱ふうつそみの

塵世の濁流ひた超えて

三

寮窓辺に泣くや人性の

運命の羈絆固ければ

愛と誠に身をせめつ

高謳ふ哉美し青春の

剛毅の陰の淨涙をば

白珠碗に掬ばなむ

四

秋闌く原始林のうら寂びて

愛智の微光凄風に散り

孤独の揺籃に熟睡する

寮友が睫に恵迪の

伝統の法燈さゆらぎて

栄光に帆立つ吾寮いま

五

生命の旅路厳肅の

啓示に喘ぐ友垣と

若き恩恵の聖火に狂ひ

淋しき魂を睦ぶとき

挽歌消え行き洋々の

自由の渚濤声とよむ

時潮の波の

(昭和二十一年寮歌)

渋谷富業君 作歌
寺井幸夫君 作曲

序

厳しかる道に仕へて
限ある玉緒惜しむ
げにさあれ深き因縁の
魂ゆるする生命の饗宴
汲まざらめや残の月に
旅の朝早くは明けぬ

一

時潮の波の寄する間に
久遠の岸に佇みて
不壊の真珠を漁りする
嗚呼三星霜の光栄よ
緑の星を夢む時
疎梢を払ふ天籟は
秘誦の啓示語るなり

二

孤窓に流る星屑に
無辺の調律訪へば
測りも知らに底つひゆ
言の葉洩れて伏し祈る
奇しく貴き生命をば
友情を讀ふ歌声の
溶け行く方に馳するかな

三

朽葉ゆらぎて湧き出づる
楡の林の真清水に
己を責めて泣く友の
拐杖を運ぶ逍遙や
遠き誓ひの日を偲び
虚しき春に嘯けば
淡れし影の寂寥よ

四

宿命の道を行く身にも
友を誇らん花筵
銀燭頬涙を照らす宵
沈黙に語る歡喜よ
心を交し思ひ酌み
団欒にふるふ共鳴は
胸の小琴を掻き鳴らす

五

北斗頭上に影冴えて
神秘の息に吹かれつつ
肩組み歌ふ旅の子を
染むる伝統の篝火よ
暮るるに早き青春の日の
追懷を込める此の盃を
汲まん今宵の記念祭

結

近きかな楡陵を去る日は
還り来ぬ足跡愛しみて
ひたぶると打笑む時ぞ
求めつつ得べからざりし
秀逸しき真理の道は
はろかなり我等が前途
進まざらめや

暁の渚離りて

(昭和二十二年寮歌)

篠原昭壽君 作歌

竹内五男君 作曲

一
暁の渚離りて

あかつき　なみさき　ひかり
ふるきもの光なきもの
底ひなき海に抛れば
いささけき水輪が呼ばふ
想ひ出の古りし仕草に
告ぐるなりいたき別れを

二
永遠に絶ゆることなく
ひたひたと寄する波間に
万象のよみがへりしを
はぐくみしなさけ忘れず
真実の旗幟を取り持ち
いゆくものひたあゆむもの

三
さあれ吾が幸は希望は
ふたたび会ふ事なしと
燃ゆる火の炎立ちに消えぬ
あるはただ宿命のみなる
さだめ故旅を行くなり
いたましきいのちと云はめ

四
小船もて浜伝ひ行き
火の神の荒ぶる山を
怖れみてかへりみすれば
たちまちに幻惑は裂け
くれなるの血潮流れて
天地は夕焼けにけり

五
涯知らぬ海さまよひて
い着きしは辛夷咲く丘
友垣とあつく結びて
いたましき宿命とかむと
ひたざまに立ちあへぐ夜半
静かなり星は降りつつ

六
溢れ出る涙留めて
丘高く秀づる草の
友よ見よ紅に映ゆるを
歓喜に充てるそよぎを
春秋は移りて行けど
睦びつつ耐へてを行かな

浅緑燃ゆる

(昭和二十二年第四十回記念祭歌)

山家貫之君 作歌
堀井洵君 作曲

一

浅緑燃ゆる北の曠里
荒ぶ嵐を身に受けて
神秘の扉開け放ち
雄叫び高く濁世に
叱咤の剣を振るふかな

二

沈黙の榆林のほの暗く
友と高望を語りてし
三年の夢は淡くとも
羽搏かなかな大鳳は
アンデスの嶺越えゆかん

三

ソロモンの栄華すでになし
血涙もて築きし幾春秋
花を褥に仮睡めば
春駘蕩の微風の香に
私語く永遠の理想かな

四

北斗の啓示なほ清く
今宵四寮に輝けば
猛き遊兎の熱血は
ナイルの河のなほ浩く
乱れし世をば呑みほさん

五

青史は薫る七十星霜の
崇高き歴史を承継ぎて
明日創造の首途に
今日四十回の記念祭
浩歌はんな吾が友よ

饗宴の杯に

(昭和二十三年寮歌)

中坪清八君 作歌
堀井洵君 作曲

一

饗宴の杯に淡れゆく
手稲の峰に今しばし
追憶止めて涙する
逝く水はやき三春秋の
絵巻はやがて尽きざらん
優しき薫香遺しつ

二

真理の道の彷徨に
遊子は尋めぬ人性を
真紅に輝く森蔭に
榎火廻りて歌へども
琥珀の酒を酌みしかど
瀛しものは何ならん

三

原始林の濃緑のまどろみに
高夢は結びぬ先人の
遺訓の蔭に泪あり
孤雁一たび大地に啼きて
驚き醒むる邯鄲の
草野に夕陽は既に没つ

四

秋の哀愁は旅の子に
ひとしほ沁みる夜半の月
悲恋の苦悩胸に秘め
北斗の光影に嘯けば
若き情熱の高鳴りて
凋落の世に響くなり

五

狂ふ吹雪に我が思索
託して進む三百の
児等の生命はみはるかす
北溟の曠野にこだまして
東の空は暁紅に染み
高き理想の旭日は出でぬ

六

楡の鐘声に逝く青春の
神秘を解かん花筵
朝はろけき旅を行く
郭公鳥よ永遠に
黒百合咲ける石狩の
汝が故郷を憶えよや

春静寂なる

(昭和二十三年逍遙歌)

中島通雄君 作歌
佐々木淳君 作曲

一

春静寂なる石狩の
曠野に漂泊ひて人を哭き
秋蕭々の寮窓に倚り
夕雲遠く友を呼ぶ
北斗の啓光さしそえど
哀れ悲しき旅ならむ

二

北溟ゆく雁は名のみにして
暮る秋風に啼く虫か
楡梢に囁ぐ郭公か
はた又魂の語らひか
現の波濤は荒くとも
知るや無象の天の外

三

十勝の峰に断雲怒り
白銀吼ゆる朝風も
奇しき調の琴と聴き
燃ゆる理想に悶えつつ
ただひたぶるに辿りゆく
長き生命の斗争に

四

自然の芸術変らねど
何処に祓所を求めゆかむ
ああ孤独の寂寥を
味はひ知れる人ならで
誰に語らん入相の
鐘鳴りひびく楡陵の上

五

花咲き散りて春秋の
遷りてここに三星霜
逝にし遊宴の宵の夢
たぎる情熱を篝火に
残恨の杯を汲み交はし
高唱はなんかな自治の歌

六

今逍遙の原野に萌ゆる
森の翠の色深く
行手遙けき豊平の
清流に泛ぶ綺花の影
哀れ愛しき絢夢なれど
我が生命こそ真なれ

彷徨へる心のままに

(昭和二十四年寮歌)

池田基君 作歌
伊藤嘉弘君 作曲

序

彷徨へる心のままに
見返りの陵を登れば
野は遙か去にし日の面影
簫々の闇にとけゆく
斯くあるは人の宿命か
天地に星の飛ぶなり

冬

雪の舞ふ砂丘薄れて
光輝なき旧りし仕種は
忘却の寄する汐音に
消え去りぬ名残の水際
叫ぶには余りに深く
涙には余りに虚し

春

清冽の玉散る知性
燃え狂ふ情熱の焰
若き身の裏に留めて
相剋の旅を逝くなり
苦悩しみに頬を濡らせば
春雨も楡影つたふ

夏

初夏の野に陽炎たてば
痛ましき魂の疵の
陽に癒えて幸福は希望は
微風に咲き出づる華
育くみし白珠の水
浜茄の赤き血潮よ

秋

秋深き磯に佇み
汐飛沫浴びし彼の時
月影に宿命解かんと
友垣の誓ひし言葉
斯く故に千草ふみしき
寥々の孤杖を運ぶ

結

三春秋の絢夢原始林影に
散り果てて悲哀を秘めつ
陵を去る遊子の瞳
又燃えぬ愛情と決意に
暁の新たな旅出
永遠に時は流れぬ

悠遠き日にあこがれて

(昭和二十五年寮歌)

高倉和昭君 作歌
金井俱光君 作曲

一

悠遠き日にあこがれて吾は来たりぬ
北国の詩の都ぞ
やはらかき緑の芝生
美はしき小川の畔
清明の森蔭深く訪ね来て
新らしき喜びに満つ

二

讃へなむ石狩の曠野に打建てし
雄大なる先人が足跡
四十三回記念祭巡りて
光栄あれ伝統の法燈
星辰清きエルムの学園に甦へりたる
鐘の音は高く鳴るなり

三

あかつきは紫の夢にけむれり
雪解なる陵にのぼりて
恋ひ慕ふ意気と血汐の
花香る青史の光栄よ
二春を魂の故郷に契りては
培はん尊き遺訓

四

仰ぎ見よ秀でたる久遠の山河
悠久の時の移ろひ
森蔭に心情は燃えて
恵むなり真理の秘奥
青春の高遠き理想を抱きては
進まなむ厳しかる道

新らたなり天地

(昭和二十六年寮歌)

長尾久司君 作歌

小林滋宗君 作曲

一

新らたなり天地
光あり北の学舎
二年を心に契る
若き日の生命の郷に
誇らなん自治と自由の
四十星霜の高き伝統よ
おごそかに遺訓をこめて
榆鐘は響かん

二

雄大いなり天地
永劫の時潮の流れよ
悠久の神秘をひめし
うるわしき石狩の野に
うたわなん希望のうたを
魂ゆるする雄叫びの日に
あこがれと正義の旗を
かざし進まん

三

きびしかる天地
野にすさぶ試練の嵐
苦しみを越えて幸あり
たゆみなく求めて得たり
輝ける久遠の真理
よろこびの若き力に
創造き行く恵迪の寮
とわに栄えん

永遠の水のひろがり

(昭和二十七年寮歌)

村上啓司君 作歌

田畑実君 作曲

一

永遠の水の広がり
去にし全ての名残りをしるす
陽の光水の面にわたらず
厚き雲の低くたれたり
大いなる水と強き風との
須臾なる静けさ今ぞ破れん
無限の過去の名残りを無みと
今こそ吾等雄々しく立たん

二

再びす宣臂の叫び
血をもて駭りし訓えを忘る
屈辱の条文は結ばれ
時の声の高く頭る
核崩壊なる強き力は
生命と愛とを毀ち捨てなん
再び過去の犯ちせじと
今こそ吾等凜乎と起たん

三

北国の樹々の直さよ
牧場の草の色の濃緑さよ
永き冬厳しき試練に
打ち耐えたる姿美わし
潮風荒べる荒磯にさえ
名もなき草木の生をば享受ぬ
自然の真理の頌歌を唱い
今こそ吾等深く究めん

手を取りて美しき国を

(昭和二十八年寮歌)

山本玉樹君 作歌
三河勝彦君 作曲

一

倒れたる友の姿を
忘るまじ我らが胸に
恐ろしき雲空に充ち
けがれたる祖国の山河に
新しき緑の息吹が
若者の槌音に和し
もろ人の幸深めつつ
この町にこだます日まで

二

沸き出でよ新らしき歌
消すまじ自由の歌を
わだつみの声をばひめて
去り果てし若き生命に
たくましき若き鼓動が
美しき歌声に和し
平和なる国を築くと
海こえてこだます日まで

悲歌に血吐きし

(昭和三十年寮歌)

柳田和朗君 作歌
菅原幸雄君 作曲

序

悲歌に血吐きし我らもが
永劫不変を求めんと
遙々漂泊来たりても
赤き浜茄子摘みとりて
悪魔牛耳り詩吟する
天下不仰の寂寥児

春

未知の世界に立ち薫る
冬の名残りか歡喜か
春爛漫のただなかに
手稲の山の淡雪の
雪解が衣の袖軽ろき
門出が詩歌を讃歌わんや

夏

原始の森に深く入り
朱碧混じる眩さに
神秘無象の影さして
郭公生命の顫律で
若き誇りに酔い痴れて
自由の頌歌歌うなり

秋

朝の白露は詩を吟じ
夕陽紅く舞い乱る
秋風高歌昂然と
踏轟ろかすストームの
孤袖の遊子大望の
希望に宿る北極星

冬

雪崩に雪を血で染めて
若き生命を捨つるとも
あこがれ清淨き樹氷恋い
奥山古き谷間小屋
空想の羽の頂上に
炉火囲み唱う歌

結

年古る樹々は皆朽ちて
生の心が落葉の
記憶の底に沈みいで
悲哀の涙ほとばしる
世の暗闇にひそめども
去る二年を謳歌えんや

花繚乱の

(昭和三十三年寮歌)

前島一淑君 作歌・作曲

一

花繚乱の夢に酔い
地の囁きの音に伏せば
草湫々の声すなり

二

夜光流るる芝草や
辛夷の花の香に迷う
遠き憧れ逝にし日よ

三

窓辺に招く幻の
影にあくがれ彷徨えば
森に桂の火は燃えぬ

四

今紅の篝火よ
裸形の友は肩組みて
去り行く青春を惜しむかな

五

静寂甦りぬ春の宵
銀漢の下希望なる
支笏の湖に星は飛ぶ

花咲き散りて

(昭和三十一年第五十回記念祭歌)

佐伯政英君 作歌
小椋進君 作曲

一

花咲き散りて五十年の
実りの秋ぞ幸多く
ここに我等が記念祭
寮友よ歌えよいざやいざ

二

楡の大樹に尋ねれば
誇らしげにぞ答へたる
吾が先人の青春の理想
寮友よ讃えよいざやいざ

三

歌声原始林にこだまして
爆笑夜空をつんざけば
楡の精さえ踊らなん
寮友よ踊れよいざやいざ

四

我等が誇る自治寮に
五十回めぐる記念祭
さらに栄ゆく此の寮を
寮友よ讃えよいざやいざ

吾れ憧れし

(昭和三十三年寮歌)

佐伯政英君 作歌
佐藤一正君 作曲

一 吾^われ憧^{あこが}れし美^{はる}の国^{くに}の

春^{はる}は名^なのみの春^{はる}なれど

雪^{ゆき}解^げの水^{みづ}に甦^{よみがえ}る

野^の面^{づら}に充^みち満^みつ生^{いのち}命^ちあり

二

遠^{とお}くふるさと離^{はな}れ来^こし

寮^{きよう}友^{とも}と睦^{むつみ}の杯^{つぎ}酌^{しやく}めば

今^{きよう}日も手^て稲^{いね}山^{やま}に夕^{ゆう}映^はえて

鐘^{しょう}声^{せい}はろかに快^{こころ}よし

三

楡^{にれ}の木^こ蔭^{かげ}に憩^{いこい}せば

紫^し紺^{こん}の峰^{みね}をこえゆきて

父^{ちち}母^{はは}いかに君^{きみ}いかに

つきるを知らぬ吾^わが懐^{おも}い

四

ただ茫^{ぼう}漠^{ばく}の太^{たい}平^{へい}野^や

静^{しじま}寂^{よく}の夜^{よる}は更^ふけゆきて

囲^{かこ}む焚^{たき}火^びも暗^{やみ}に消^きえ

夜^よ空^{ぞら}彩^{いろど}る北^{ほく}斗^と星^{せい}

清き生命の

(昭和三十四年寮歌)

吉野生壮君 作歌
中川清吾君 作曲

一

清き生命の初潮に

大なる志を打ち樹てむ

学び舎の緑消えんとすれど

求めて止まぬ探求の

心は常に変る事なく

二

毅き生命の奔流に

燃ゆる生命を貫かむ

時代の波は荒れ狂うとも

永遠に変らぬ誠実の

青春の血は絶ゆる事なく

三

直き生命のただ中に

熱き念をそそがなむ

頭上に黒き雲漂えど

燃えて尽きせぬ創造の

生命の光消ゆる事なく

茫洋の海

(昭和三十五年寮歌)

三浦清一郎君 作歌
前野紀一君 作曲

一

茫洋ぼうようの海うみに憧あこがれ

峻險しゅんけんの峰みねを慕したいて

北国きたくにの大地ちに旅行たびけば

溢あふれ満みつ夢ゆめ若わかさ

果はてしなく広ひろごれる地平線ちへいせん

二

曇くもりなき心こころ求もとめ

厳きびしかる努つとめの道みちに

真まことなる美さかを探さがらんと

人ひとの世よの旅たびにして

結むすばれし二年ふたとせの宿やどなれや

三

移うつり行ゆく時ときにはあれど

涙なみだして誓ちかいし言葉ことば

尊とうとしや若わかき日ひの夢ゆめ

春しゅん秋じゅうの十年ととせの後のちに

思おもい出で声こえもなく俣しばんや

甦えれ白き辛夷よ

(昭和三十六年寮歌)

小川徳人君 作歌
脇地炯君 作曲

一

甦えれ白き辛夷よ

吐息なす憂悶の日も

寂莫のまどろみも去り

オホーツクの水やわらぎて

流水の群軋める国に

彷徨のい着きしを知る

朽葉ぬき頭もたげし若き息吹は

わが若き日の昏迷を掻く

二

濃霧を呑み大気は青む

輝ける太陽に酔い痴れて

高澄の日高の峰を

わだつみの青をば追わん

ああ慵げき虚を破りて

筋骨は火照に燃えぬ

エゾマツの深き樹林を渡る雄叫び

わが若き日の胸に響かん

三

眼路渺茫の野末遙けき

石礫の曠野に励む

先達の真情を凝らし

地の熟睡静かに温む

真紅をはきて入日たゆたい

颯々とポプラは鳴れる

友どちの組たる肩は若く息づく

わがあすの日の耕土を期して

四

白皚々と六華は咲けど

うす月は雲をどよませ

逆巻の吹雪は狂う

邂逅に結ぶ灯火

濃き鈍色ににじみそめつも

手をとって声を落さじ

明晰な眼を持ちて凝視る道に

わが霹靂の痕を印さん

壁歌は語る

(昭和三十七年寮歌)

執行洋視君 作歌
助川秀三郎君 作曲

一

壁歌は語る幾星霜

あつまさん

集り散ず若人が

夜々に語つたる苦悩の記

日々語つたる歓喜の記

ああその意気は永遠に栄えん

二

壁歌は続く百年に

美辞をば嫌いし若人が

好機に変えたる時流の言

好機に乗りし時流の波

ああその思出いつか崩れん

三

壁歌は残る千代に

日夜ひもとき探索に

我が捨てたる邪道よ

我が容れたる真理よ

ああその純情後に偲ばん

凋落正に秋深し

(昭和三十八年寮歌)

諏訪正明君 作歌
宮田睦彦君 作曲

一

楡が木の葉の秋風に
吹かれて落つる芝草に
佇む男子の胸の中
散りしく落葉の数知れず
凋落正に秋深し

二

灰青白き月影の
銀杏並木の夜歩きは
小さき鳥の乱れ飛び
路面覆える金色に
憂愁正に秋深し

三

寮が窓越し蔦の葉も
黄色く紅く色づきて
梢を揺する秋風に
鳴るは心のため息か
寂寥正に秋深し

四

ゆえだもあらぬこの悩み
心の底に滲み入りて
ぬぐいも切れずただ涙
流れ落ちては地に吸われ
懊悩正に秋深し

偉大なる北溟の自然

(昭和三十九年寮歌)

司馬威彦君 作歌・作曲

序

偉大なる北溟の自然は
我が眼前に限りなく広がりて
野に満てる清冽の気は
雄々しくも気高き情懷もて
嶮路遙かに辿り来し
遊子が胸を今や満しぬ

一

颼々の北風は荒び
白銀の華大地覆えど
そはろかなる古より
汚れなき美の世界なれば
若人はひたぶるの
愁いを秘めて
異邦ゆ憶れ集いぬ

二

いよ増す静寂のなかに
永劫の影宿す原始の深森よ
先哲の行路を慕いて
思索胸に榆陵を歩めば
仰ぎみるエルムの梢に
萌え出ん若き情熱は

三

かりそめの宿にはあれど
忘れ得じ若き日の遍歴
彷徨えば夕陽の榆陵に
宵闇はかそけくも訪れ
睡みてし真心と友情に
篝火は赤く燃えたり

四

輝ける北国のたくみよ
されど優りて美しき自治の伝統よ
斗い苦悩み寮友と語れば
なごて疾く過ぎ行く二年の春
願わなん永久の栄えを
恵迪の寮故郷の上に

結

されど視よ我等が周囲を
邪悪なる権力は四方に荒び
我等が愛し誇らん自治の砦に
暴逆の誠は課されんとす
されば我が寮友よ腕むすびて
今ぞ正義の旗を高くかかげん

新しき陽は

(昭和四十年寮歌)

金子公良君 作歌
西雪弘光君 作曲

一

新しき陽は今昇り
空のはて黎明を告ぐ
黒き雲西に流れん
吹きすさぶ嵐をつきて
平和をと声は轟く

二

逞ましき友の怒りに
雄々しくも我等誓いし
幸の世永遠に築かん
広き地に鋳ふりかざし
緑萌え水流るまで

三

輝やける祖国の山河に
こだまする我等が雄叫び
一すじの光求めて
ひたすらにただひたすらに
腕組みて歩み進まん

四

真実の鐘鳴り響き
森影にどよめきのわく
自治の旗風にゆらめき
名を留む伝え守りて
恵迪は今よみがえる

いつの日か生命結ばん

(昭和四十一年寮歌)

須藤洋一君 作歌
吉川正文君 作曲

序

重畳たる手稲藻岩の山脈を吾が宿舎の青垣となし
鬱乎たる原始の叢林を吾が逍遙の小径となす。

吾が寮友よ草原に出でよ、暗き孤城より出でんかな。

深遠き蒼穹あまりに青く、輝く雪原あまりに白し。

さればよしその身は平々凡々ならんとも、吾等が野望尽くるを知らず。

静寂を破る蛩声に、吹雪鎮むる高吟に 青春の意気託しなん

一

いつの日か生命結ばん

碧空高き楡よポプラよ

黄金なす銀杏並木よ

枯れ枯れと曠野に朔風吹けば

荒涼の憂愁よぎりぬ

三

鶏はまだ長鳴かずして

貪れる熟睡をあとに

仄暗き叢林に佇立てば

今いずこ青き野望は

消え行くや先人の遺声

五

睡み来て親友は高唱えど

舌苦き地酒に酔い痴れ

ストームに身は狂乱うとも

忘れ得じ果てなき旅路

この惆悵誰に語らん

二

島松の雪の路上に

手を振りし遠き日の夢

去り行きぬ偉大なる巨影

君聞くや馬上の声を

広ごれる石狩の原野に

四

蝦夷人よ今こそ瞑想え

星辰しるき彼の冬空に

天翔ける天馬の行方

吹雪き荒ぶ北風をつぶてを

若駒の鞭とはなさん

六

暖かき光求めて

彷徨えり冷たき野末

北国に春来りなば

若き日の稚き愁思は

雪の如融けて流れん

寒氣身を刺す

(昭和四十二年寮歌)

岡田雄三君 作歌
森田弘彦君 作曲

一

寒氣身を刺す北国の
永遠に名を覇す恵迪寮
四百野人の集いしに
我等が理想何時の日か
成さざらむとぞ意気高し

二

窈窕多し札幌に
弊衣破帽の身なれども
一度歌わば蜚声の
遠く手稲に木霊して
嗚呼誰か知る吾が野心

三

燃ゆる紅原始林
尽きぬ想いを酒杯に
酔えば肩取り乱舞する
吾等が行先に光明あり
樂しからずや此の饗宴

四

蒼空の下佇みて
木の葉身に降る秋の日に
仮いこの身は一介の
卑しきものと知るとても
吾が野望は永遠に

芳香漂う

(昭和四十二年第六十回記念祭歌)

稲田雅久君 作歌
名田正信君 作曲

一

芳香漂うやわらかの
露の春の夕間暮
朧にかかる夕月に
浮かぶ辛夷の花吹雪
ああ鳴り止みて聞えこぬ
色壮麗の鐘の音は
六十路の夏に鳴らざるや
いま黄昏の自治の庭

二

細き羽音も秘そやか
蜉蝣闇をかすめゆき
奔る流れの音もなく
まつよい草の星あかり
ああ死に絶えて泳ぎこぬ
銀鱗おどる紅鮭は
六十路の秋に溯らずや
いま宵闇の自治の川

三

風に棚引く軽やかな
雲蒼空の朝ぼらけ
よぎる秋津の影紅く
残んの月は薄れゆく
ああ舞い去りて渡りこぬ
ながの旅寝の雁は
六十路の冬に還らずや
いま有明の自治の原

四

軒に麗なる銀の
垂氷に映る灯に
星影凍みる松が枝を
散るひとひらの雪の花
ああ枯れ果てて萌しこぬ
野も狭に埋もる花の実
六十路の春に咲かざるや
いま夜も更けぬ自治の舎

五

露に滴りぬ生々
榆林にねむる夢醒めて
牧場におどる朝もやの
さなかに歌う夜明の鳥
見よ紅の山の端に
湧き立つ空の群雲を
つらぬきわたる光かな
いま六十歳の夜は明けぬ

六

寮友の顔に篝火の
炎もわらう記念祭
歌をうたわば玉響の
憂さも舞い飛ぶ火の粉なり
いざ高らかに祭歌
はやる太鼓の轟きは
夜空を深く駆け抜けて
北斗に和する生命なり

樹梢霧海に

(昭和四十三年寮歌)

新橋登君 作歌

佐藤菊男君 作曲

一

樹梢霧海に消え入りて
北溟牙城の夏の宵
難攻不落を誇りしも
時凋衰の風強し

二

伝統の石に佇みて
往昔の意気に涙する
秋の今宵の宴にも
貧交行の風寒し

転句

榆陵の二春に宿せる白露の
生命短命にして吉しとする
さにあらば吾等が友よ
久遠なる星に
崇巖に大志を告げるべく
今高らかに誓いけん

三

白雪深き北国に
迪をたずねる旅人よ
朔風如何に荒吹とも
真理の郷は遠からじ

四

いざ寮友ようたわなん
あすの生命を闘うと
万花乱るる春の日に
高遠き大望を目指さんや

孤独に満てる

(昭和四十四年寮歌)

山崎芳行君 作歌
服部泰明君 作曲

一

孤独に満てる我が青春に
何時しか遅春も訪ずれぬ
まだ萌えやらぬ芝生の上に
一片舞い散る桜花
朝露に濡れ新たな寮友と
盃かわす楽しさよ
嗚呼我一人にあらずして
我が青春は寮友とあり

二

孤独に満てる旅人一人
理想を求めて蝦夷へ来ぬ
その彼の人の心知れりや
原始の森に鳴く郭公
寮友と別れて一月経ちぬ
今日懐しき便りあり
嗚呼我一人にあらずして
我が青春は寮友とあり

三

孤独に満てる我が自治寮に
早くも秋の気配あり
夕日に映ゆるポプラの並木
憂愁風に枯れ葉飛ぶ
再び会いぬ寮友と連れ立ち
真理の国を彷徨いぬ
嗚呼我一人にあらずして
我が青春は寮友とあり

四

孤独に満てる我が同胞に
厳冬正に伸し掛り
深雪に埋むる原始の森へ
月光冴かに突差しぬ
冷酒を飲み野心語れば
いとど深まる友情かな
嗚呼我一人にあらずして
我が青春は寮友とあり

秋逍遙

(昭和四十五年竄歌)

熊野芳明君 作歌

吉田守男君 作曲

未明

秋に秋添う時雨月
曙星瞬く恋々と

されど近づく蕭晨に

幽愁はつのるせつなくも
落涙しばし悄然と

払曉

蕭晨は来にけり石狩野
野菊に滴る血の雫
木の葉さやぎぬ涼風に
野を流離えば深き哀愁
情けの露を探求むなり

昼

遙かに煙る大平原
蕭然秋の小糠雨

原生林の錦も色寂し

黒俊馬の長嘶に沈思破れ
秋の情趣を知る二十

落日

時雨もやみてあかねさす
赤紫雲の黄昏に
夕陽返し珠玉の如
蜻蛉が翅翎に我が久懷
真情の友へと託すかな

初更

釣瓶落しの秋の日の
紫紺の闇に淡く浮く

利鎌の秋月はあな悲し

きらめく長庚にただ涙
己が運命か斯くあるが

深更

夢幻か人の世は
秋の百子夜に我悄然
地平の彼方へ冴星空を
過りて落つる流れ星
ただただ涙は何故か

朔北に

(昭和四十六年寮歌)

伊藤正朗君 作歌・作曲

一

朔北さくほくに手稻ていね風の咆哮おろし絶えて
静寂しじまに痛いたし遠汽笛とおきてき
凍いてつく雪原はらに寒月かんげつの
蒼あおき光ひかりの射さしそえば
聳ボブラ天樹かげの影かげは猛たけくして
虚空そら指さす彼方かなた宿やどり舎やの
灯ひは今宵こよひまた旅人たびとの
継つぎ培つちかいし迪みちを諭さとせり

二

朝焼あさやけて南みなみに風かせの起たつ聞きかば
北きたの都みやこに春近はるちかく
雪融ゆきとけ水みずの溢あふれては
豊水ほうすいの岸塵きしちり高たかし
黄きばむ空そらゆく鳥とりもなく
土つちの香かぞする野幌路のほろじを
孤ひとりそぞろに辿たどる日ひは
異郷いきようの旅たびを思おもひ侘わぶかな

三

はろばろと続つづく沃野よくやの玉葱ねぎ畠はたけ
金きんに輝かがやく北指きたさして
延のびる鉄路てつろの傍かたわらに
かいの石狩いしかりの文学碑ぶんがくひ
濁にごれる川かわに臨のぞみては
沈しずむ夏陽なつひに涙なみだする
回顧かいこ百年ひゃくねん忘れずや
この地拓ちひらきし先人せんじんの夢ゆめ

榆陵に月は

(昭和四十七年寮歌)

加藤秀弘君 作歌
矢野哲憲君 作曲

一

榆陵に月は懸れども
星霜深き原始林暗し
藜羹ゆらぐ風有れど
思い分かつたん術も無し

二

天空破る落雷はあれど
そびゆる聳天樹は堂々と
慟哭の声上げらんと
意気揺籃の時は今

三

銀晶ふるう雪原なれども
変らぬ沈黙奇しきかな
黄鶴消えて姿無し
蘇える春まだ遠く

四

鐘の音遠く聞えども
雑踏の声さざめきの
辛夷花咲く黎明よ
石狩の野今何処

五

無尽の星を仰げども
天に無双の北斗星
白亜の城に覚醒し
永遠の生命を誦わなん

六

未明に懸る白き月
夢見し思う北溟の海
憧れ来しは北溟の峰
呼々我前途の行く果は

冬の大地に

(昭和四十八年寮歌)

伊藤潤平君 作歌
矢野哲憲君 作曲

一

冬の大地に夢は醒め
あさひ うか はくあじよう
旭日に浮ぶ白亜城
げんし もり じゅひようさ
原始の森は樹氷咲き
にしかたそら なが
西方空を眺むれば
しんせつあわ ていねやま
新雪淡き手稲山

二

ポプラ並木の葉も落ちて
あき かふか ゆうまぐ
秋の香深き夕間暮れ
はくじつにし しず
白日西に沈み行き
そげつひがし もり
素月東の森に出ず
けんこんめく ま めぐ
乾坤環り復た周る

三

浜茄子の砂丘たたずみて
はまなす おか
はるかに眺むオホーツク
しれとこ みねゆき
知床の嶺雪かぶり
しず いりひ はくちよう
沈む入日に白鳥の
かげ かな
飛影ぞ哀しく消え去りぬ

四

旅のロマンに誘われて
たび たび さそ
支笏の岸にさまよえば
しこつ きし
静寂の嶺は莊嚴に
しじま みね そうこん
仰ぐ星座は闇に浮き
あお せいざ やみ う
静に光る北極星
しずか ひか ほっきよくせい

五

荒ぶ吹雪ぞ旅の魂
すさ ふぶき たび たま
一年涙胸に秘め
ひととせ なみだ ひ
我が夢かけるオリオンに
わ わ
我が春永久に朽ちざらん
わ はるとわ く
蝦夷が大地ぞ忘るまじ
えぞ だいち わす

北の都は

(昭和四十九年寮歌)

大森秀治君 作歌・作曲

一

北の都は開発かれて
喪失われゆく大自然
寮の姿も変われども
恵迪の名は永遠に

二

残雪溶けて東風吹かば
大地は黒々と輝けど
川流絶えて水は涸れ
湿原に咲く花影なし

三

緑葉さわぐ楡の森
昔日の影すでになく
短き盛夏の夕陽を浴びて
ただ寥々と佇立まう

四

虚空逍遙う月の影
蒼白く映ゆ原始森の木々
秋風にうたれて舞う落葉
早雪までのこの眺望

五

白雪烈風に舞い上がり
疎々たる杜を吹き抜けぬ
樹影に黒き鴉鳥
寂莫として声もなし

六

警醒の鐘鳴らせども
迷夢の夜は未だ明けず
行方も知れぬ朔風に
心の痛みつのるかな

七

北に旅してこの宿に
仮寝の夢を食りて
過ぎし歲月早二年
懐かしさ満つこの団居

憧憬の故郷

(昭和五十年竊歌)

佐藤守君 作歌

関川哲夫君 作曲

一

「汝が故郷は何処にありや」
あつちにおみはあふ
熱き血潮に身は溢れども
のぞみわねゆくえ
希望を胸に行方も知れず
かぜみよさすら
朔風に身を寄せ漂泊い出でん

二

聳ゆるボプラは何をか象徴し
そびなにかしる
遙かな大地は何語るらん
はるだいちなにかた
渺茫の地に理想を秘めて
びようぼうロマン
真摯の道を歩みゆかん
しんしみちあゆ

三

逍遙の詩静寂に透り
しやうよううたしじまとお
曠野を一人ゆく吾侪めば
のひとりわれたたず
日輪幽寂に手稲の端にて
にちりんしずかていねは
朱に染まらん哉原始の森は
しゆそかなげんしちり

四

嗚呼寮友よ夕の瞑想
ああともしちゆうべおもひ
己身に嘆けども憂愁はやまず
みなげうれい
白銀の季節寮舎に在りて
はくぎんとくすみかあ
あつこころを語り明かせよ

五

光幽けき憧憬の故郷
ひかりかそしやうけいさと
霞静かに流れ渡りて
かすみずながわた
新緑にみる自然の黙示
しんりよくしぜんもくし
北溟の大地は我が故郷か
きただいちわふるさと

いつの日にか

(昭和五十一年寮歌)

小嶋茂君 作歌

真鍋利徳君 作曲

一

夜は巡り
限りなき光の束は
樹林をつらぬきぬ
朝の静寂の中一人にて
無為の思いもち嘆き憂える
もう情熱もなく涙ながる

二

何を求め
ほの暗き大気の底に
真摯な魂は
一つの心を持ちさまよいぬ
もはや言葉なく凍てつきて立つ
ポプラを見つめ祈りささぐ

三

大きな精神
物思う我らに
いまだあれどかすかなり
不毛の日々はかわき過ぎ去りぬ
なれどいつの日か結びつけなん
我等が命大きな魂へ

四

女性の清き美しさ
真摯な理性の輝きにさそわれて
ほのかな恋の想い胸に
なれど結びえず
あまりに深き心のあがき
この暗さに

五

深き森のささやき
清冷な川の流れに聞きいりて
清らかな中我息しなん
物を思わなん
静けさの中とけこみいりて
いつの日にか

新な燈火

(昭和五十二年寮歌)

石川徹君 作歌
元辻毅君 作曲

一

北^{きた}国^{くに}の荒^{すさ}ぶ吹^ふ雪^{ぶき}に
榆^いの木^きの高^{たか}く聳^{そび}える
原始^も林^りの中^{なか}果^はてる事^{こと}なく
雄^お々^おしくて人^{ひと}の臉^{まぶた}に
何^い時^つ迄^{まで}も鮮^{あざ}やかに刻^{きざ}む
其^その姿^{すがた}を恵^け迪^{いて}寮^{きりよう}は

二

憂^{ゆう}愁^{しゆう}と理^り想^{そう}を胸^{むね}に
爽^{さわ}やかに寮^{さわ}友^{とも}は去^さり行^ゆく
夜^よを徹^{とお}し未^み来^{らい}の事^{こと}を
御^お互^{たがい}に語^{かた}った部^へ屋^やに
思^{おも}い出^{いで}の言^{こと}葉^はを残^{のこ}し
懐^{なつ}かしい恵^け迪^{いて}寮^{きりよう}を

三

年^{とし}月^{つき}に傾^{かたぶ}く姿^{すがた}
痛^{いた}ましく懷^{おも}いの残^{のこ}る
部^へ屋^やの壁^{かべ}崩^{くず}れ落^おちて
昔^{むかし}から点^{とも}る燈^{とも}火^{しび}
今^{いま}はもう細^{ほそ}くなり行^ゆく
我^{われ}々^{われ}の恵^け迪^{いて}寮^{きりよう}を

四

先^{せん}人^{じん}の残^{のこ}した燈^{とも}火^{しび}
心^{こころ}有^ある寮^{さわ}友^{とも}よ絶^たやさず
思^{おも}い見^みて新^{あらた}な燈^{とも}火^{しび}
今^{いま}こそ探^{さが}し求^{もと}めて
点^{とも}そう絶^たやす事^{こと}なく
何^い時^つ迄^{まで}も恵^け迪^{いて}寮^{きりよう}に

恵迪節

(昭和五十三年寮歌)

甲斐陽輔君 作歌・作曲

一

エイホッホッホッ

エイホッホ エイホッホ

けむりを噴き出す

有珠の山 有珠の山

地をやぶる土の力こぶ

エイホッホ エイホッホ

大地の主の大あばれ 大あばれ

命がおしけりや

地べたにひれ伏せ おろかもの

二

エイホッホ エイホッホ

塩を噴き出す

大きく 大きく

太平洋にはねる神の魚

エイホッホ エイホッホ

海の主の大あばれ 大あばれ

俺がこわけりや

海にぬかづけ おろかもの

三

エイホッホ エイホッホ

大地に根をはる恵迪寮 恵迪寮

深雪をとかす友の血潮

エイホッホ エイホッホ

二百五十の青春のくるい咲き

若さがつらけりや

銀河にさけべ おろかもの

エイホッホ エイホッホ

草は萌え出で

(昭和五十三年第七十回記念祭歌)

朝倉仁樹君 作歌
田坂幸平君 作曲

一

草は萌え出で郭公は鳴き
憧れ睦ぶ宿舎に
疾風怒涛の渦の中
明り求めて放浪いぬ
巷の塵をふり払い
悠々迪を歩まん

二

蜚声放歌乱舞する
姿雄々しき吾なれど
原始林の可憐な白花に
心ふるわす春もあり
清き乙女子去りて行く
恋に涙す秋もあり

三

気高き野心の男の児等が
士幌に山小屋をうち建てぬ
十勝の山と平原に抱かれ
果てなく魂翔けるなり
厳しき北の大地より
新たな夢に飛びたん

四

読み飲みの語り夜は明け
熱き情に年は経る
ああ青春の祭日も
はや七十を数うなり
寮生よ再び楡影に
三十年後に集わなん

うす紅の

(昭和五十四年寮歌)

鶴原文孝君 作歌
高田和重君 作曲

一

うす紅くれなゐの秋あきゆうぐれに
滅ほろびの風かぜは吹ふき荒すさぶ
斜しや陽ようかげ射さす日ひに移うつろいて
傾かたむく姿すがた痛いたましく
我が胸むねに満みつ過いにし日ひの映はえ
懷おもいは恵迪けいてきと共ともに

二

うす紫むらさきの冬ふゆあけどきに
透すみわたる風底かぜそこ凍こる
もの音おと絶たえて冷つめたく寒さむく
暗くらくも映はむ空むなしさに
倒たおれゆくもの今いまこの時ときに
想おもいは恵迪けいてきと共ともに

三

うす靄もやけぶる春はるあけぼのに
昔せきじつ日の影かげたゆたい惑まどう
されど緑みどりはまだ若わかくして
咲さき初そむ花はなの望のぞみもて
新あたしき日ひのかげろい浮うかぶ
憧あこがれ恵迪けいてきと共ともに

四

うす花はないろの夏なつよい闇やみに
たまゆら風かぜはさわやけし
我が宴うたげにも星降ほしふる幸さちと
歌うたう寮友とともらの嬉うれしさに
憩いこえる帆ほにも希おもいありたし
夢ゆめこそ恵迪けいてきと共ともに

五

うつろう四季ときに感おも慨いをこめて
朽くちゆくものを見みつめつつ
いまだ乾かわかぬ血けつ涙なみをもて
ただひたすらに祈いのり捧ささぐ
唯ただ一しん真実じつの迪みちを残のこさむ
想おもいは恵迪けいてきを永遠ととわに
希おもいは恵迪けいてきよ永遠ととわに

楡は枯れず

(昭和五十五年寮歌)

新井桂二君 作歌
奥田和人君 作曲

北に生まれし者たちよ

北に出会ひし者たちよ

北に奢れる者たちよ

北に歌える者たちよ

永遠に祈りし朝は未だかなわす

百年に織りたる衣は当に引き裂かれんとす

嗚呼願わくば二度糸を紡ぎて

限りなく澄みわたる穹北の空に舞わん

一

朝靄けむる今ひとときの

熟寝の夢の幸せよ

覚めて現に見渡せば

美は崩れゆく北都なり

天空常に雲抱けども

楡は萌えて大地をまねく

二

清冽の野に道を耕し

荒野に明日を信じつつ

彷徨い行ける寂しさに

陽は傾きて我を見る

虚いゆける時にこそ

楡は映えて風を斬る

三

北の自然は蝕ばまれゆき

青葉の降るや青春の寮庭

忘るるなかれ大願を

胸に秘めし涙痕を

時は人へと変われども

楡は枯れず空をさす

汝と我の

(昭和五十六年寮歌)

山根誠君 作歌
長谷部健君 作曲

一

よすがなき姿も見せぬ郭公を
捜せしは誰ぞ汝と我の瞳なり
草いきれ燃えたつ野にて戯れぬ
獣らは誰ぞ汝と我の姿なり
原始林と古屋を覆いたる
邪なものをめぐる世に
正義の想い何処にか
汝と我の胸にあり

二

轟ける荒磯の波のただ中を
漕ぎゆくは誰ぞ汝と我の腕なり
アカシアの狭霧漂う道辻を
疾けゆくは誰ぞ汝と我の跣なり
移ろい巡る天地を
己が父とし母として
のびゆく命何処にか
汝と我の胸にあり

三

降りつもる雪に太古の巨象を
描きしは誰ぞ汝と我の感傷なり
夜もすがら思い乱れる若人を
見つめしは誰ぞ汝と我の恵迪なり
天宙駆ける参星の
幽けき光仰ぎ見て
語りしことば何処にか
汝と我の胸にあり

東雲はるか

(昭和五十七年寮歌)

青木崇君 作歌
栗田成裕君 作曲

一

東雲はるか異郷の地
凌雲の夢馳せ巡る
真理の辿は険しくも
寮友よ力を二にせん
熱き血潮は冷めやらず

二

繁る夏草風渡り
悲しみ隠す屋下り
故なき暴虐忘るまじ
寮友よ怒りを一にせん
熱き血潮は冷めやらず

三

蜩うたう原始林
木洩れ陽ふるう夕まぐれ
思い乱れて暮れる日は
寮友よ祈りを一にせん
熱き血潮は冷めやらず

四

闇の彼方の楡木立
灯透かす青葉蔭
そぞろ歩きにふるう月
寮友よ歩みを一にせん
熱き血潮は冷めやらず

寮友よ永遠に謳歌わん

(昭和五十七年閉寮記念寮歌)

植木貴昭君 作歌
串田厚司君 作曲

一

早緑の道駆けし我
小川に映る延齢の花
今この時の憧憬に
はるか千嶂仰ぎ見ん
心の静庵ここにあり
我が夢馳せし夕暮れに
明日の旅路を想いなん

二

北陵の夏歩む我
今咲きそろうす影のリラ
熱き涙のほとばしり
正義の道を貫かん
我等が誇る自治の魂
清雅にはゆる星よりも
深遠にして無限なれ

三

吹雪の中に立てし我
原始の森に先人のかげ
盃かわす寮友と
過ぎせし日々の感激よ
我等が道のしるべなり
我が春遠き北都にも
誓いの絆永遠に

寮生の道

(昭和五十八年寮歌)

泉進介君 作歌
島倉朝雄君 作曲

凍てつきし氷の路も溶けはじめ、見はるかす山に白雪消ゆる頃
集い来し百と四十の若人は故郷も親も銭もなく恃むは己の仁侠ばかり
然れども新たな舎りの恵迪は五層六刃の白亜城
夜も希望の灯は消さず、棲むは豪傑酒乱の徒
さあ来いさあ来い恵迪へ北都に築かん我等が自治寮

春(四月)

秋(十月)

ちよいとそこ行く新入寮生さん

ちよいとそこ行く寮生さん

明日は我身か知らねども

尻に赤フン巻きつけて

大酒くらって逆噴射

狂喜乱舞す交差点

これぞ寮生の生きる道

これぞ寮生の生きる道

夏(八月)

冬(二月)

ちよいとそこ行く寮生さん

ちよいとそこ行く寮生さん

弊衣破帽に食糧難

ジャンプ大会 変態か

両親の顔が眼に浮かぶ

花の女子大 赤面す

これぞ寮生の生きる道

これぞ寮生の生きる道

まとめ

ちよいとそこ行く寮生さん

クラーク精神胸に秘め

天下の北大 恵迪でもつ

これぞ寮生の生きる道

(※前口上は島倉朝雄君の作による)

北に恵めし

(昭和五十八年新寮記念寮歌)

大崎益孝君 作歌
竹中秀文君 作曲

一

北^{きた}に恵^{もと}めし若^{わか}き日^ひの夢^{ゆめ}
いつかは壊^{こわ}れゆくものか
すがしき朝^{あさ}の光^{ひかり}と風^{かぜ}は
原始^{げんし}の森^{もり}に消^きえ去^さりぬ
今^{いま}こそ我^{われ}も旅^{たび}立ちの時^{とき}
心^{こころ}の宿^{やど}よいざさらば

二

北^{きた}の原^{げん}野^やを流^{さす}離^らい行^ゆけば
淡^{あわ}き花^{はな}影^{かげ}さゆらぎぬ
今^{いま}も変^{かわ}らぬその涼^{すず}風^{かぜ}に
昔^{むかし}の光^{ひかり}偲^{しの}ばずや
流^{なが}れる雲^{くも}に孤^{ひと}り謳^{うた}えば
果^はてなく夢^{ゆめ}は何^{どこ}処^こまでも

三

北^{きた}を望^{のぞ}みし岬^{みさき}に立^たてば
うち寄^よす波^{なみ}は静^{しず}かなり
されど遙^{はろ}けき今^{いま}樺^{サハリン}太^タの
色^{いろ}めく空^{そら}を憂^{うれ}い眺^みん
功^{こう}利^りし多^{おほ}きこの人^{ひと}の世^よに
誠^{まこと}の迪^{みち}を貫^{つらぬ}かん

雪の白さに

(昭和五十九年寮歌)

濱田和雄君 作歌
青木毅君 作曲

一

雪の白さに映ゆる我等が恵迪寮
吹雪逆巻く日もあれど
正義の迪を見定めて
真実求むは風の教へなり

二

土の黒さに萌ゆる新たな芽が一つ
雨風寒さに怯ゆるとも
宴討論酔ひしれて
恵迪に根づくは土の教へなり

三

空の青さに育つみんなの自治意識
熱風日干の害あれど
理想高く足は大地につきて
汗を流すは陽の教へなり

四

秋の疾風に聳ゆ大きな林檎の木
頂上の実が墜つるとも
その精神もて糧として
自律目指すは生命の教へなり

沈黙の杜に

(昭和六十年竊歌)

角田勤君 作歌

佐々木徹也君 作曲

一

沈黙の杜に春來告げる
芳香馨し辛夷の花よ
純白き残雪未だ消えやらす
永き寒冬偲はるる哉
郷愁胸に充滿つるとも
されど恵迪此処に在り

二

水恋鳥の哀しき聲に
我故知らず涙流しぬ
短き夏と認識りはすれども
樹々色づきてはや盛夏逝きぬ
哀愁胸に充滿つるとも
されど憧憬恵迪に在り

三

紅雲流るる黄昏どきに
夕細道は幽か続きて
何望むなく彷徨ひゆける
この現身を悲哀しみにけり
愁心胸に充滿つるとも
されど青春恵迪に在り

四

雪舞ひ踊る白銀の世よ
天指す枝柯に樹氷咲く
数多群なす星座の中に
我に向いて天狼星光る
寂寥胸に充滿つるとも
されど經營恵迪に在り

五

弛むことなく唯時は逝き
生きとし生けるものは去りゆく
其は人の世の眞理なれども
限れる生を燃やし尽さむ
追憶胸に充滿つるとも
されど恵迪永遠に在れ

陽春新しき

(昭和六十一年度寮歌)

原澤辰明君 作歌

山森聡君 作曲

一

陽春新しき希望満つ
恵迪寮に若き男子等が
野心も赤き夕手稲
嗚呼力もて進まんか

二

盛夏短かくてストームに
太鼓音闇に消えるかな
朝の日露に寮歌の声
嗚呼轟くかこの石狩平野

三

夕暮風の涼しさに
楡の悲しみ知れるかな
雁より暮れる原始林
嗚呼我が憂ひすすろかな

四

北溟粉雪に荒ぶれど
詩を忘却れぬ若人が
理想の存在求めつつ
嗚呼その自治寮創造くかな

五

淡き憧憬に焦れ来る
拙き言葉操りて
胸の内を打ち明けし
嗚呼この青春も早や行かん

六

宴の酔狂も静寂まりて
沈黙の彼方微かなる
郭公の啼声の清らかさ
嗚呼この初夏も過ぐるかな

七

北斗煌く晩秋夜
望月写す支笏湖の波
明日の旅路を思いつつ
嗚呼涙して更くる夜

八

疎々たる原始林に我一人
白雪舞う木立烈風強く
冷徹たき真理索めんと
嗚呼声もなく迪を行く

九

春も巡れる四度に
若き明日の祝極と
南風頻りに頬を打つ
嗚呼この別離永却からず

北斗遙かに

(昭和六十二年度寮歌)

佐久間朗君 作歌

吉田崇君 作曲

一

北斗遙かに広がる波濤煌く水平線
移り行く天水渡る朔風嚴冬の記憶を留めれど
新緑萌す曠野には若き生命の息吹あり
嗚呼季節の芳香満つこの北の大地に
新たな夢を得て希望かなえん

二

北斗清かに見はるかす紺碧に滲む大空に
輝く光彩燦爛と短き盛夏を彩りて
涼風そよぐ窓下には緑滴る原始林
嗚呼季節の恵み満つこの北の大地に
新しき情熱もて真理求めん

三

北斗豊かに色づける黄金色の大沃野
充足誘う黄昏に遠く彼方を見渡せば
牧場を疾走る若駒の荒土蹴散らすその雄姿
嗚呼季節の実り満つこの北の大地に
新しき力得て正義貫徹かん

四

北斗果てなく包み込む荒び飛び散る猛吹雪
物皆埋み凍てつかせ我らが前途閉ざせども
ひたすら拓くその迪に放歌笑声絶ゆるなし
嗚呼季節の憂愁満つこの北の大地に
新しき意識もて自治を築かん

惡魔死す瞬間

(平成元年度寮歌)

宜寿次盛生君 作歌

田口拓君 作曲

一

惡魔死す瞬間何を凝視る
サタンしときなに
解けざる呪鬼ヶ島
のろいおにがしま
北溟の国この城に
ほくめいくにしろ
我旅立ちの時を待つ
われたびだときま

二

降りたる魔王荒れ狂ふ
をまおうあくる
若き生血を吸ひ蘇へる
わがちすすよみが
西都の異変我知らず
せいとへんわれし
春欄漫に酔ひ狂ふ
はるらんまんよくる

三

祭終りて黄葉散り
まつりおわもみじち
暗雲広がる秋の空
あんうんひろあきそら
希望の東光恨みつづ
きぼうひかりうら
冬將軍が猛狂ふ
ふゆしょうぐんたけくる

四

白銀の原野は静まりて
しろがねののしず
地獄転じて黄泉の国
じごくてんよみくに
野人籠りて微睡みて
やじんこもまどろ
今旅立ちの春を待つ
いまたびだときま

我榆陵に — 春行秋哀 —

(平成二年度寮歌)

木村政明君 作歌
田口拓君 作曲

一

足引きの手稲の峰よ
遙けくも偉大なるかな
巖かに夕陽は沈み
山際に映えては著し
黄昏の山並を愛ず
稜線の美しさ永遠に

二

人の世は移ろいやすく
今日の夢明日は空しき
されど葉の散る梢には
潜みたり次代の若芽
ああ友よ理想の世界
いつの日か成るを夢見む

三

並木路は黄金に映えて
秋の日の愁いを誘う
人氣無き小道歩かば
胸に湧け孤高の思い
風に舞え飄飄学徒
いざ守らむ真理の灯

四

瞬くは北斗の星か
我進む道を照らさむ
仰ぎ見む悠久の天
思わずや遠き故郷
夢若き春の旅路よ
我榆陵に清き花咲け

若芽の出づる

(平成三年度寮歌)

柴田一君 作歌・作曲

一

若芽わかがの出づる早春さうしゅんに
孤影こえいも辞じせぬ若人わこうどの
尖風せんふう躰たいを貫つらぬけば
漲みなぎる大志たいしの息吹いぶき有り

二

万物ばんぶつ謳歌うたう盛夏なつなれど
榮華えいがの闇部あんぶ忘るまじ
凱風がいふう四界しかいを覆おおへども
鬼哭きこくの嘆なげきは芯しんを凍いて

三

紅葉こうよう咲ほゆる秋あきの窓まど
落葉らくよう瓢ひさこの様さまを見みむ
疾風しっぷう怒濤どとうの世よなればこそ
真理まことの迪みちを一筋ひとすじに

四

氷雪ひょうせつ猛たける嚴冬げんとうは
心膽しんたん練磨れんまの時節じせつかな
烈風れつふう大地だいちを劈つんざけど
揺ゆるがぬ我われらがこの宿居やどり

熱き街

(平成四年度寮歌)

美濃成夫君 作歌・作曲

一

熱^{あつ}き街^{まち} 冬^{ふゆ}まだ見^みぬ若^わ草^{かくさ}よ
丘^{おか}に騒^{さわめ}く黄^きの芝^{しば}の
声^{こゑ}を勝^か利^{ちう}歌^たに
開^{ひら}ける野^や心^{しん}は路^{みち}の上^{うえ}
原^も始^り林^りをつらぬく

二

寄^よする闇^{やみ}俺^{おれ}の樹^きはつづれない
忍^{しの}びよる業^{ごう}の糧^{かて}も
鎧^が袖^{いしゅう}一^{いっ}触^{しゅく}す
積^{くも}雲^もに箕^ほ微^ほ笑^えむ月^{つき}の面^もに
孤^{ひと}り気^きを吐^はく

三

覇^はする壁^{かべ} 水^{すい}晶^{しょう}降^ふる明^あけの街^{まち}
静^{せい}寂^{じやく}の暴^き君^み座^ざすれども
生^{せい}をみごもる
珠^{たま}のはじける日^ひも近^{ちか}し
息^{いき}を潜^{ひそ}めよ

四

熱^{あつ}き街^{まち} 俺^{おれ}の名^なは恵^け迪^{いて}寮^{りょう}
四^し山^{さん}を震^{ふる}わす四^し股^この音^ねに
煩^{なや}悩^みは吹^ふき散^ちる
目^ま線^なめざすは天^{てん}下^{かい}一^{いち}
迪^{みち}を極^{きわ}めよ

今日の寮歌^{うた}

(平成五年度寮歌)

小川太郎君 作歌
柳谷信吾君 作曲

一

今日はワシらが風呂掃除^{ふろそうじ}
溜まりに溜まった水垢^{みずあか}を
何度も何度も擦り落とす^{なんどなんど}
背中を互いに流しあい^{せな たが}
湯船^{ふね}につかりて寮歌^{うた}唸る^{うな}

二

今日のエッセン^{きよう}尋ねれば^{たずねれば}
鳥^{とり}とドンコと里芋^{さと芋}と
人参^{にんじん}玉ねぎ^{たまねぎ}煮染め^{にじしめ}なり
喰^くらふは同じ釜^{かま}の飯^{めし}
笑いも絶えぬこの団居^{まじり}

三

今日の議論^{ぎろん}は長^{なが}かった
今^{いま}や褥^{しとね}に突^つつ伏^ふさん
窓^{まど}の外^{そと}には初冠雪^{はつかんせつ}
夜^{よる}も白^{しろ}みて鳥^{とり}は啼^なき
紫雲^{しうん}に明^あけは染^しみていく

四

今日の飲^のみは遺跡^{いせき}の地^ち
夜空^{そら}に瞬^{またた}く星^{ほし}の海^{うみ}
安焼酎^{やすしょうちゆう}を酌^くみ交^かわし
男^{おとこ}と男^{おとこ}が涙^{なみだ}する
ここが恵迪^{けいてき}俺^{おれ}がやる

六華ぞ窓に

(平成七年度寮歌)

宇野直哉君 作歌
永田将人君 作曲

一

六華ぞ窓に刻まれる
灯灯ともされて
家家の街に散るほど
まみえんとすは
迷走の土と初なる乙女
鈍き銀なる空の下
暖かき片隅求むる若人等

二

時効なき戦争裂かれたる
一会の愛の光芒と
時代に漑の沈むを見つ
新興の今何かを思う
世にふる柳の薄緑
岸に萌えただよ
しだれて音もなく

三

白き岩肌かいなとり
登りて伝う水の城
折しも廠の潤い映えて
光の花の冠受くを見ゆ
この灼熱よこの碧水よ
たどりこし我等が
魂まで飛沫せよ

四

別る道を限りとて
露けき草にさし入るも
月日に添えてうち紛れず
思い乱るる面影に添う
友の一言軽からず
肝胆相照らしき
月影燦然と

五

残照長く尾を引けば
安らぎ満ちて夜の声
さらば我らが土中の碧の
その重みこそ出会ひし歓喜
新たな一歩しるしつ
忘るまじ清き
華かなる憧れを

若き力

(平成八年度寮歌)

長谷川健君 作歌
石井英一君 作曲

一

高鳴る胸の血潮たかな むね ちしおま卷く
熱い情熱あつ ソウルに身をまかす
ただその意気こころを信じしんじつつ
堂々どうどう迪みちを拓ひらきゆく
我は泰山われ たいざん北斗ほくとの身み

二

彼何者かれなにものぞ何なにかある
我が若き力わが ちから奮起ふんきせば
鎧袖がいきう一触いっしよく地に碎くだき
天てんにも響ひびけ「嗚呼ああバンカラ！」
憂うれい忘れわすれよ杯つぎを酌くめ

三

希のぞみは高たかしけつ青あおし
芙蓉ふようばん万里かりの風かぜを待まち
しばしおさめしこの翼つばさ
雄図ゆうとを胸むねに刻きざみたる
鴻鵠こうこくの志しをだれ知しるや

昇龍の夢

(平成九年度寮歌)

長谷川健君 作歌
石井英一君 作曲

流転行路に我仰ぎ見る

桃色空に龍の雲

我昇龍の夢に入る……

霞こめ雄き林を抜け出でて

辿り着きし我がふるさとの

垣根は山河陽はおちて

大いなる水海に月映ゆる

ふるきよき力強きふるさとに

はぐくまれし嗚呼我は

不壊の哲い引き提げて

龍のごとくに昇りゆく

しかれどもいつしか其れも身を移し

昔を偲ぶ此の我に

時の流れを感じつつ

今あたりを見渡せば

新しき世界の広がり新しき

ものここに見て我思う

「彼の哲い引き提げて

若き力で昇りゆけ」

ふと仰ぎ見る紅空に

龍の雲は形くずし流れゆく

天地人

(平成十年第九十回記念祭歌)

一谷英樹君 作歌
長谷川健君 作曲

一

紅^{こう}天^{てん}かなた 大^{おお}鷺^{わし}舞^まいて
茜^{あかね}さす朝^{あさ} 陽^ひも映^はゆる
天^{てん}より落^おつる カ^かムイの瀑^{ばく}布^ふ
地^ちに轟^{とどろ}くや
夜^や気^{きた}高^{たか}まりて 銀^{ぎん}漢^{かん}の群^ほ星^し
きらめくや
北^{ほく}天^{てん}望^ぞみ 九^{ここの}十^{そじ}路^ろ
大^{おお}いなる 能^ち力^{から}求^{もと}めん

二

簀^{そび}ゆ連^{やまな}峰^み 果^はて無^なき眺^{なが}望^め
猛^{たけ}き心^{こころ}を 駆^かき立^たてぬ
北^{ほく}嶺^{くれい}の樹^も海^り 深^{しん}遠^{えん}成^なして
我^{われ}を呑^のみ込^こむ
無^む限^{げん}緑^{りょく}野^や 静^{しじま}寂^{うち}の中^なに
満^{つき}月^{げつ}と飲^のむ
北^{ほく}土^と佇^{たたず}み 九^{ここの}十^{そじ}路^ろ
澄^すみ渡^{わた}る 瞳^{ひとみ}視^みつめよ

三

臥^ふ竜^{くりゅう}の牙^{きば} 深^{しん}淵^{えん}潜^{ひそ}み
鳳^{ほう}雛^{すう}の翼^{つばさ} 時^{とき}機^きを待^まつ
誇^{ほこ}り語^{かた}れり 現^{いま}在^き記^{ねん}念^{さい}祭^い
奮^{ふん}起^き飛^とび出^いでよ
我^{われ}ら^{こころ}が魂^{たま} はや九^{ここの}十^{そじ}路^ろ
沸^わき立^たたん
青^{せい}人^{じん}満^みちて 九^{ここの}十^{そじ}路^ろ
狂^{くる}おしき 滾^{たぎ}りほとばせ

生命萌え出で

(平成十年度寮歌)

小日山輝泉君 作歌
長谷川健君 作曲

一

生命萌え出で 輝く榆陵に
真白の翼 蒼空高く舞う
仮寝の宿に 我が身はあれど
風行く先に 心は駆ける

二

謳歌いて暮れる 晩秋の夜
篝火染める 紅の頬
今燃え上がる 一瞬の夢
我達の滾 夜空を焦がす

三

凍てつきし 原始林 髪凍る小路
聞こゆるはただ 白雪の声
大地清める 白銀の露
眠る若芽は 何をか夢む

四

雪残る 春寮友の門出に
共に歩むは 月光の路
果て無く 続く 指標 無き旅
野心を胸に進みて行かん

清華の誓

(平成十一年度寮歌)

荒木洋祐 作歌
小出隆広 作曲

一

雪舞う地平にひとときわ映える
六華の紋ぞ我等が砦
野心は満ちて冬空焦がし
樹間の風は情熱を運ぶ
杯に写る未来をみよう
夜明かし語るこの今にこそ
カペラの歡智オリオンの武勇
天よ聞よ我等に賜え

二

国を覆い地球を揺るがす
四百志士の夢よ醒めよ
太平洋にかかる橋にぞなれる
我等がゆくてに光あり
寮で培う時間を糧に
いざうちつれて歩み出そう
北の都に世紀はめぐり
清華の誓今ここに

若人よ

(平成十二年度寮歌)

野路直之君 作歌
村中剛洋君 作曲

一

春風興^{しゅんぷうおこ}せ我が若人^{わこうど}よ
大地^ちを君^{きみ}の色^{いろ}に染めよ
理知^{りち}無^なかりしも血氣^{けつき}注^そがば
光明^{ひかり}の迪拓^{みひろ}かれん

二

使命^{しめい}は未^{いま}だ君等^{きみら}が華^{はな}ぞ
捧^{ささ}げよ汝^なが情熱^{おもひ}
留^{とど}まり酌^くみてただ人^{ひと}を待^まつ
尽^{こと}きる事^{こと}なき我が希望^{のぞみ}

(※繰り返し)

三

別^{わか}れは近^{ちか}く再^で会^{あい}は遠^{とお}し
巢^す立^だつ友等^{ともら}の愛^{いと}しさよ
君^{きみ}の比翼^{ひよく}の鳥^{とり}となりたし
翔^かけめぐらんかな共^{とも}に

(※繰り返し)

(※)

涙^{なみだ}たがりて白雲^{くも}を流^{なが}せば
満^{つき}月^{われ}も我等^{わた}を讃^{たた}へんや
一^{いっし}矢^{たけ}の猛^{せい}りが青竜^{せいりゅう}となりて
天^{てん}に昇^{のぼ}るは今^{いま}この時^{とき}ぞ

蒼天へ

(平成十四年度寮歌)

上川雄之君 作歌
千葉直樹君 作曲

一

翠^{あお}き早^さ緑^{みどり}あまりに深^{ふか}く
若^わ葉^かに臥^ふせし風^{かぜ}吹^ふく榆^お陵^かの
寮^こで培^{つちか}うこの大^お志^{もい}
寮^と友^{とも}との絢^ゆ夢^めは東^し雲^の明^めかり
佇^{たたず}み移^{うつ}ろう憧^{あこが}れを
今^{いま}こそ我^わが身^みの翼^{つばさ}と成^なさん

二

碧^{あお}き雪^{ゆき}迪^{みち}あまりに長^{なが}く
星^{ほし}影^{かげ}映^はえし原^{げん}始^しの森^{もり}を
放^さ浪^{まよ}い往^ゆかんはこの恵^{のぞ}み
心^{しん}緒^{しよ}乱^{みだ}れて我^わが身^みの果^はても
折^おれぬ野^こ心^{ころ}を誓^{ちか}いつつ
六^{りっ}華^かと月^{つき}を燈^{とも}火^{しび}に

三

蒼^{あお}き天^{てん}空^{くう}あまりに広^{ひろ}く
榆^にと風^{かぜ}とに我^{われ}等^らは宿^{やど}る
魂^{たま}の懊^な悩^やみは雲^{くも}散^{ちら}し
新^{あら}たな雄^お叫^こび羽^はばたきに
大^{おお}いなる生^{せい}命^{めい}抱^{かか}え得^えて
飛^とび発^たたんいぎ北^{ほく}斗^との雄^{ゆう}途^と

ああグツと

(平成十五年度寮歌)

井口拓君 作歌
持田翼君 作曲

一

もしも海が酒ならば
お前は魚になるといふ
俺は渚の貝になる
波が来るたび酒を飲む

二

つまみはそうさ俺の脳
酒にとろけた脳みそさ
代わりにお前を盃に
空の頭蓋に酒を注ぐ

三

明日は泥土に墜ちるとも
今は昇らんはしご酒
美しい盃を重ねては
その身月にも届くべし

四

盃もめぐりて今や今
魍魎魍魎が顔を出す
ヤマトノオロチ現れる
大トラ小トラ管を巻く

五

更け行く夜に浮かぶ月
窓辺にうつる影は今
何をし何をされるのか
月は黙って見るばかり

六

中天高く日は昇り
今日もマグロの大漁旗
死屍累々の戦場に
兵どもが夢の跡

七

天の夢から落っこちて
今日は地を這う宿酔
「なぜ繰り返す過ちを」
空しく響くいつもの問い

八

積んでは崩す盃は
賽の河原の石積みか
それでもいつか天に着く
その日を信じ盃を酌む

九

とかく憂の多い世を
されば払えよ玉帚
積もる芥の流れては
自ずと心開くべし

十

たとえ百年生きたとて
わずかに三万六千日
されば尽くさんこの盃を
一日必ず三百杯

折れたポプラよ

(平成十六年度寮歌)

高橋直樹君 作歌

山口駿君 作曲

一

折れたポプラよ

おまえは何を言わんとす
酒注ぎ交わし乾した夜の
見上げた月の傍らで
おまえの匂いが映らない
心配せなや友達よ
永久に変わらず継いでやる
たとえこの世が変われども
俺や寮友らが歌うだろう
生命の継ぎ目が終われども
心配せなや友達よ
お前は此処に生きている

二

折れたポプラよ

おまえは何を言わんとす
緑が踊る夏の日も
茜に溶ける秋の日も
同じ生命を供にした
肩を組もうぞ友達よ
俺とお前は同じ土
側になくともその根が
歌声や思いを繋ぐだろう
その身朽ちゆく運命ども
肩を組もうぞ友達よ
次代がお前を芽吹くだろう

三

折れたポプラよ

おまえは何を言わんとす
別れの雪を踏みしめて
固め歩んだ迪の未来
春の色する夢なれや
供に称えん友達よ
思うは日々のいたずらか
過ぎせる時間の限るに
尽きぬ涙は言足りず
見つめる春は違えども
供に称えん友達よ
六華が我等照らすかな

遙かなる迪

(平成十七年度寮歌)

加藤信泰君 作歌

福岡萌君 作曲

一

繁^{はん}滋^じなる
思^{おも}いを秘^ひして寮^{まなびや}の
門^{もん}をくぐりし若^わ人^{こうじ}は
意^{こころ}気^{ため}試^{ため}され育^{はぐく}まれ
熱^{あつ}き契^{ちぎ}りの友^{とも}を得^えん
楡^{いれ}の若^{わか}葉^は曜^{かがや}くごとく
遙^{はる}かなる迪^{みち}に根^ねを張^はらん

二

時^{とき}は過^すぎ
大^{つち}地^ねに根^ねを張^はる若^{わか}芽^がらは
思^{おも}い託^{たく}され懊^お惱^うしつ
切^{せつ}磋^さ琢^{たく}磨^まし歩^{あゆ}む毎^{ごと}
寮^{まなびや}支^さえる大^{たい}樹^{じゅ}とならん
祭^{まつり}の燈^{あかり}火^{かがや}曜^{かがや}くごとく
遙^{はる}かなる迪^{みち}を継^つぎ行^ゆかん

三

何^{いつ}時^ひの日^ひか
此^{ここ}処^{まな}で学^{まな}びしひとごとが
か^わけがえのない寶^{たから}とならん
別^{わか}るる友^{とも}に思^{おも}いを託^{たく}し
旅^{たび}立^だつ未^さ来^きは暗^{くら}くとも
雪^{ゆき}野^のに朝^{あさ}日^ひ曜^{かがや}くごとく
遙^{はる}かなる迪^{みち}に出^いで行^ゆかん

ただ一心に

(平成十八年度寮歌)

岩崎良平君 作歌
吉田和史君 作曲

一

紺碧こんぺきの空そらを貫つらぬく

一筋ひとすじの白雲くも

無限むげんの可能性おもしろい我が胸むねに秘ひめ

広ひろがれる迪みち

ただ一心いっしんに信じ歩あゆもう

二

漆黒しつこくの闇やみを貫つらぬく

静しずかな月明あかり

内うちなる大志おもしろい息いきを潜ひそめて

開ひらかれる朝あさ

ただ一心いっしんに信じ臨のぞまん

三

臙灰ろうかいの雲くもを貫つらぬく

揺ゆるがぬ意思こころ

昔年せきねんの想おもい翼つばさと共にとも

光差ひかりさす先さき

ただ一心いっしんに信じ飛とび立たつ

四

真紅くれなゐの心しんを貫つらぬく

熱あつき眼差まなざし

叶かなわぬ夢おもい友ともらに託たくし

新あらたなる迪みち

ただ一心いっしんに信じ進すすもう

恵迪小唄

(平成十九年度寮歌)

井関俊介君 作歌
八城雄太君 作曲

一

金^{かね}がないのが最初^{さいしょ}の縁^{えん}で
入^{はい}ってみたのは良^よいけれど
すみかはポロ屋^やに得^え体の知^しれぬ
上^{うえ}の年目^{ねんめ}が一絡^{ひとから}げヤレ
思^{おも}えば遠^{とお}くへ来^きたもんだ

二

大志^{たいし}抱^{いだ}きて北都^{ほくと}へ来^きたが
気付^{きつ}けは朝寝^{あさね}に高^{たか}いびき
自分^{じぶん}は違^{ちが}うと言^いってはみたが
サア明日^{あした}から頑張^{がんば}るぞヤレ
朱^{しゅ}に交^{まじ}われれば朱^{あか}くなる

三

酒^{さけ}を飲^のみ飲^のみ話^{はな}もすれば
突然^{いきなり}ドンパと突^つつ張^ばり合^あい
時^{とき}には突^つき上^あげ時^{とき}には日^ひ和^より
奴^{やつ}より俺^{おれ}の方^{ほう}が上^{うえ}ヤレ
同^{おな}じ団栗^{どんぐり}せいくらべ

四

先^{さき}は長^{なが}いと思^{おも}っていても
時^じ間の経^たつのは早^{はや}いもの
苦^く楽^{らく}を伴^{とも}に住^すんではいたが
避^さけては通^{とお}れぬ別^{わか}れ道^{みち}ヤレ
縁^{えん}は異^いなもの味^{あじ}なもの

星の舟唄

(平成二十年度寮歌)

黒瀬智子君 作歌・作曲

一

雪^{ゆき}どけ五月^{さつき}晴^ばれ短^{みじか}い夏^{なつ}の日々^{ひび}
黄金^{こがね}のいちよう並^{なみ}木^きくぐれば木^こ枯^がらし
あしたも同^{おな}じ夕^{ゆう}日^ひが沈^{しず}むだらう
青春^{せいしゅん}は退^{たい}屈^{くつ}だと誰^{だれ}か歌^{うた}う

二

まどろむ子^こ守^{もり}唄^{うた}人生^{じんせい}の哲^{てつ}学^{がく}
雲^{くも}にかくれて消^きえる木^こもれびの夢^{ゆめ}
眠^{ねむ}りをさまようまぶた開^{ひら}けば
まこと学^{がく}成^{なり}りがたし月^{つき}が笑^{わら}う

三

悠^{ゆう}々^{ゆうく}暮^くらすこの若^{わか}さを持^もて余^{あま}し
港^{みなと}にたどりつくさだめなき小^こ舟^{ふね}
目^めじるし一^{ひと}つの星^{ほし}追^おいかければ
流星^{りゅうせい}雨^{あめ}のごとく目^めをくらます

四

あまたの先^{せん}人^{じん}が説^とく壮^{そう}大^{だい}真^{しん}理^り
この脳^{のう}はそ知^しらねども目^めの前^{まえ}にあるは
瞳^{ひとみ}の暁^{あかつき}うつくしき人^{ひと}
千^{せん}の論^{ろん}説^{ぜつ}より多^{おほ}くを語^{かた}る

五

つつましい志^{こころざし}が正^{ただ}しき答^{こた}えか
道^{みち}草^{くさ}のかたわらに咲^さく花^{はな}もある
学^{まな}べよ遊^{あそ}べよ恋^{こい}せよ舟^{ふね}は
風^{かぜ}が導^{みちび}くままに青^{あお}き帆^ほを張^はる

雲海貫く

(平成二十年第百回記念祭歌)

石井翔君 作歌
木川明音君 作曲

一

雲海貫く泰山に

伍山を覇せと吼える熊

俗野に満てる四面の楚歌を

真理のたけびで吹き飛ばす

マツリダマツリダ

マツリダヒグマ

二

混沌尽きぬ泥濘に

曲学阿世くたく虎

世をまどわす混沌ぬえを

真理の瞳で睥睨す

マツリダマツリダ

マツリダモウコ

三

濁流荒ぶる大飛泉

己身一つの六六魚

時の趨勢物ともにせず

龍に転ぜと登りゆく

マツリダマツリダ

マツリダオロチ

四

流れに流れ一百年

祭りに祭って一世紀

真理を求む若学徒

今ぞ狂いて大宴

マツリダマツリダ

マツリダゴッホ

六華雪解に

(平成二十一年度寮歌)

丸田潤君 作歌・作曲

一

六華雪解に佇みて

故郷を去りし若人が

清き野心を胸に秘め

しばし憩わんこの宿舎

二

酒飲み宴し夜は更けて

明く迄語り日々は行き

燈火闇に浮かび出づ

輝き永久に絶やさずや

三

理想の自治を手にするは

常に寮生が高みなり

崩れゆくこの時にこそ

不断の尽力忘るまじ

野性に吠えろ

(平成二十二年度寮歌)

林祥史君 作歌・作曲

一

静かに暮らす

憂さ晴らしより

生き恥さすらい

なすがままに

野性に吠えろ歌えよ踊れ

野性に吠えろ狂えよ狂え

二

訪れ去りゆく

底なしの日々

慰安を求めど

言葉は足りず

野性に吠えろ歌えよ踊れ

野性に吠えろ狂えよ狂え

三

思い出すたびに

記憶はうすれ

枯れ葉の紅

落陽に散る

海の碧さを伝えておくれ

空の高さを伝えておくれ

野性に吠えろ歌えよ踊れ

野性に吠えろ狂えよ狂え

広がるはただ青き旅路ぞ

(平成二十三年度寮歌)

安田龍平君 作歌
我如古弥司君 作曲

春風吹きゆく原始の森に吾れ微睡みて酒宴して逍遙すれども其の歩は止まず
危急の時代にあればこそ渦巻く疾風吾が勇を呼び怒涛は汝れに義を求む
今ぞ吾等が誠を奮い高唱いて進まん青き旅路を

星は昂々美稲超えて
玉黍を食む旅鳥や
染まず彷徨う其が白羽に
斗星と大志の結ぶ瞬間
広がるはただ青き旅路ぞ

月は朧々輝光は幽か
梢叢分けて河に落つ
水面に透くきみが底に
己が混濁をうつし見て
孤月仰ぐ子よ誰が為に泣く

宙は悠々逍遙の果て
芝草を枕に星を抱く
有情の声に朋友和す寮歌を
讃えて天宙を見上げば
広がるはただ青き旅路ぞ

花は灼々壤撃つ酔いを
君影草の鈴音にきく
さればこの手を春陽高く
翳して情熱をうち燃やし
濃緑に萌ゆ白花に誇らん

雪は皚々大地軋めて
氷嵐まさに街を呑む
無明の曠野に巨熊眠るも
弦を矜持と爪弾けば
嗚呼黎明に吹雪も霧散す

快速エアポート

(平成二十四年度寮歌)

丸田潤君 作歌・作曲

(※)

快速エアポート僕を乗せ汽笛を鳴らして駆け抜ける
旅行者達は両腕に白い恋人提げている
車窓流れる街を背にカンバの林を抜ければ
僕はもう独りぼっちさよなら youthful days

一

思い浮かぶ四年前の春のことその時も
僕は独りこの列車に揺られていたよ
希望に膨らむ夢と一分の不安抱えて
雪の残る窓の外を眺めてた

(※繰り返し 白い恋人をじゃがぼつくるに変える)

二

思い掛けず頬を伝う一筋のその涙
別離の先明日へ向かう決意の証
二度と帰らぬ青春あれは夢か幻か
だけど僕は紛うこと無く寮に居た

(※繰り返し 白い恋人をジギスカンキャラメルに変える)

北溟の我らぞ

(平成二十五年新々寮三十周年記念寮歌)

森貝聡恵君 作歌
菊池玄之介君 作曲

一

君何故来たるこの北溟の地に
かの師の教へ受け継ぎし地に
貴き野心ゆめ忘るまじ

ひたと気高く

いざ踏み出さむ新たなる夢へ

二

野心は強く熱くとも

道草恋しき時もあるかな

青き春の夜友らが宴

語り合おうぞ

我らが大きき夢の芽

三

我らが未来はいかなるものか

曇り澱みし過去ではあれど

これより先は我らが拓かむ

先達に続け

大和の栄えをば担うは我らぞ

二つの春

(平成二十五年 度寮歌)

丸田潤君 作歌・作曲

一

降りしく雪は終るを知らず、未だ窓下には白銀の町。
されど陽光は日毎に増して、春の訪れを微かに予感う。
幾許もせず別離の時は来て、寮で過ごせし日は想出となる。
雪上の足跡融け去り消ゆるよに、巢立つ若芽も晩冬と共に去り行く。

二

残雪融かす春風吹きて、原始林陰に萌ゆる新芽は踊る。
生命の鐘声は北都を巡り、長き寒冬の影は消え往く。
去りし寮友との月日胸にして、新たなる一年の扉を開く。
若き我等の熱き血滾らせて、ひたすらに只青春を歩みて行かん。

姫月に重ねて

(平成二十六年 degree 寮歌)

松元一平君 作歌
寺尾佳隆君 作曲

観月過ぎゆく晩秋の夜、穹蒼の天空高く舞ひたる月は今宵満つるかな。
その清輝に映えし姫が鏡水は、鹿が純瞳に宿らむ。
月影は鹿を誘ひ来たりしこの神無月に何をば見せむ。

一

時移ろひて人世は変われども
今宵も満月は我らを照さむ
夜の邪帳をはらはむと
流歩む汝は楡に似たれど
風流を掴まむ芽に感ず
風習に付和せし
狗と成らざらめや
さて映りこむ我が鏡瞳に
風習だに愛づるその気概

二

清澄みたる想ひ知る由もなく
今宵の三日月は川面に映らむ
かの日の月影とは違へども
人世に充つ解答を自ずと心得
此れは汝の求望にか
漲る想ひなどか劣らむ
さて映りこむ我が鏡瞳に
身を委ねばやその清流

三

静と唸りし雨霽したたれば
今宵も我は臙月を仰がむ
姫が麗姿を追憶ふべく
汝が想ひは涙と落流れ
透かし斜光にさらさるる
閉じなむ凌雲よこひ願はくば
さて映りこむ我が鏡瞳に
嗚呼汲まれたしその厭心
悲しかりけむ晩秋の夜は
月影映えて人影も追ひ得じ

咲く六華よ

(平成二十七年 度寮歌)

鈴木美奈君 作歌
小松遼貴君 作曲

一

まなやののに 咲く六華よ
まなやののに 咲く六華よ
われを招く北寮の幸
のぞみうるわ
大望麗しこの道に
めいかますらおつと
名花丈夫集い来る

二

すずかぜ 涼風に舞う箱柳
うたな 寮歌鳴り響く夕餉時
せんじんつ 先人継ぎし一途を
まふ 未だ踏み初めし寮友なり

三

ゆえいかたふ 楡影傾く夜の静寂
まどろ 微睡み知らぬ 蔦住居
うれ 憂いの醒めぬ 世の岐も
みゆく 満ち行く若月が 照らすかな

四

きせつめぐ 季節巡りて朔風は 凪ぎ
むかう 無何有の郷を 離る時ぞ
あわす 嗚呼忘るまじき 我が迪の
よわいの 齢延べたし 青き春

此の寮よりの児

(平成二十八年 度寮歌)

小松遼貴君 作歌・作曲

一字に集いし青二才共に三途の川は未だ遠く
四の五の言わずも六華で過さば北斗七星背を照らす
八紘辿りて九達を巡らん十色の明日へといざやいざ

抒

北の都に若人が

大きな理想抱え来て

明ける月夜に継がれる人情

飽くまで語り前途見遣れ

寮清ければ我等住まぬ

把

恵みの雨も降りしきり

迪を呑み込む時化呼べど

帆を張れば平らぐ濤燦然と

確と舵取れ其の身空

我等の寮得たるが如く

究

寮で相撃つ竜と虎

歌い響かす己が大志

琢磨し君と此処寮を以て

咲きつ根張り胸を反れ

我等と寮となれこの日々よ

不香の花ぞ

(平成二十九年 度寮歌)

冠花君 作歌
佐藤亮君 作曲

一

不香の花ぞ柔らかに
霊舞い遊ぶ纖細の
樹間に薫る雪煙
白妙綻ぶ棹透り
蒼空麗しき北の幸
憂き世肴に耽る子ら
枯淡の美にも感激ずや

二

血潮滴るナナカマド
落葉千々に原始林を抜け
雪の波打つ海原か
振れば残映光なく
枯れ蔓覆うこの寮に
自然に根ざす孤独得て
冬の無情な愛を知る

三

散ればこそよと小夜嵐
喧騒遠く鎮まりて
銀壺に燃ゆる胸の中も
愁い込めたる赤天も
黙す吹雪に命呬ゆ
厳しき雲海に唯独り
帆立つ遊子馳せし滯

蔦壁照らす

(平成三十年第百十回記念祭歌)

小田嶋元哉君 作歌・作曲

一
蔦壁照らす 赤き火は
つたかべて あか ひ
ひやくとおつた かがりび

百十伝わる 篝火よ
もろこえ いきたか
諸声上げよ 意気高く
とも あ
寮友に負けじと 先へ行け
ま さき ゆ

二
星降る北は 赤き空
ほしふ きた あか そら
汽笛が街を 切り裂けば
きてき まち き さ
応え轟き 廻る酒
こた とどろ めぐ さけ
きみ けいてき きた ほし
君よ恵迪 北の星

三
炬燵布団で 轟くは
こたつ ふとん うごめ
あす ゆめみ わかがくしゃ
明日を夢見る 若学者
みみにく
その身醜く あったとて
きみ こころ
君が心よ 清からん

四
秋早去りぬ 朝ぼらけ
あきはやさ あさ
もや あさひ あか やり
靄こめ 朝日 赤き槍
ひと ふ
一振り 天を 割りたまえ
きみ くんなん のぞ
君ぞ 苦難の 望みなれ

五
新しき日々 朝は来た
あたらし ひび あさ き
きみわす
君忘るるな その心
にひやく かいだん だい いっ
二百の 階段 第一歩
うた わら まこと
歌え 笑え 誠なれ

広がりし海原に

(平成三十年度寮歌)

樋浦一希君 作歌・作曲

一

春あけぼのの夢に見て
カムイの声に導かれ
舟をこぎいで流れ来ぬ
北都夜明けの金字塔
広がりし草原にひとりたち
はるかなる大雪の山
のぞみみん

二

夏宵闇の緑風に
森が葉音を雨ときき
榆の木立をさまよえば
紅はゆる山小屋ひとつ
広がりし高原にひとりたち
はるかなる天空の星
身に浴びん

三

秋夕暮れの鹿の声に
恵みの季節は過ぎゆきて
入日の茜に涙する
冬音せまりき危機焦燥
広がりし牧野にひとりたち
はるかなるシベリアの風
気も霧散す

四

冬つとめてのゆめうつつ
かそかに遠く銀狼の咆哮
凍てつく寒さに身を起こし
胸に秘めたる青写真
広がりし雪原にひとりたち
はるかなる白雲の頂
旅に追ふ

五

今祭日の猛き火よ
寒風蒼碧を貫かん
大地を揺るがして嵐おこる
新風破天の新時代
広がりし蝦夷に寮友は和し
はるかなる先代の魂
解き放つ

奔る流れ

(令和元年第百十一回記念祭歌)

樋浦一希君 作歌
伊藤小雪君 作曲

一

曇天低く晴緑の山
曇 どんてんひく 低 せいろよく 晴 やま 緑 なみ の 山 たか
高くみあげて岩打つ波間
高 たか く み あ げ て 岩 いわう 打 なみ つ 波 間 しじま
静寂の底に力を秘して
静 しじま 寂 そこ の 底 ちから に 力 ひ を 秘 ひ し て
揺れては消える蒼銀の魚影
揺 ゆ れ て は 消 き え る 蒼 あおぎん 銀 か の 魚 影 かげ
未薔は満ちて華ならん
未 みらい 薔 はな は 満 み ち て 華 はな な ら ん

二

急滝高く紅の木々
急 きゆう 滝 うりゅうたか 高 くれない く 紅 き の 木 々 ぎ
散る葉をうけて渦まぐ白泡
散 ち る 葉 は を う け て 渦 うず ま く 白 泡 しらあわ
一瞬ここに己を賭して
一 ひととせ 瞬 とせ こ こ に 己 おのれ を 賭 と し て
白銀に煌めけ緋赤の川面
白 ぎん 銀 きん に 煌 きら め け 緋 ひ 赤 せき の 川 面 かわも
祭りは咽く華たれや
祭 まつ り は 咽 たけ く 華 はな た れ や

三

月影長く原始林を貫き
月 つき 影 かげ 長 なが く 原 も 始 り 林 つらぬ を 貫 つらぬ き
街影映す学舎の流れ
街 まち 影 かげ 映 うつ す 学 まなび 舎 なび の 流 なが れ
刹那輝き我今生きて
刹 せつ 那 な 輝 かがや き 我 われ 今 いま 生 まい き て
札幌に舞う川辺の銀鱗
札 ひとざと 幌 と に 舞 ま う 川 かわ 辺 べ の 銀 ぎん 鱗 りん
咲くは次代の華なれや
咲 さ く は 次 じ 代 だい の 華 はな な れ や

榆陵を仰いで

(令和元年度寮歌)

佐藤亮君 作歌・作曲

一

嗚呼悠遠き日の燈よ
我らが自由を映しなん
今宵風が火を掠め
燭台鈍く声漏らし
枯れ蔓綻び覗かせて
仄かに蛸は細くなりゆく
されば問え己が心に
我が胸内は寮が誇りよ

二

嗚呼悠遠き日の鞆物
流転の輝き放ちなん
嘗て疾風に先人は
掴み離さず此れを継ぎ
擦傷僅かに見ゆれども
威風今こそ我が手に至る
されば感ず時潮の想い
手に得し重み寮が誇りよ

三

先人残せし貴き野心の
それにも優る縁在り
いづれ別れるその運命まで
囲み語らい己が未来創れ
榆陵の片隅我が故郷は
斯くあるべしと誰か言う

鴉翼の影

(令和二年度寮歌)

落合海宇君 作歌
加納央都君 作曲

一

雲居くもいの空そらに黒銀こくぎんの羽はね
六華りっかの深緑みどり薄れゆき
二豎にじゅの魔ま北溟ほくめいの地ちを蝕むしばみて
鴉翼からすはなにをか鳴なかん

二

空そらの鏡かがみに夜よさりの事跡じせき
若人わかとの光迪ひかり幽かそけきものへ
闇やみの暗夜よ浣澌はつしつたる影かげを牽ひきて
鴉翼からすはなにをか知らん

三

朝明あさけの風かぜにたなびく黒翼つばさ
陽ひは悠揚ゆうようと手稻ていねの山端はしに
春はるの芽吹めふき静寂しじまの榆林ゆりんの中なかに
鴉翼からすはなにをか語かたらん

北嵐

(令和三年度寮歌)

吉野萌君 作歌
加納央都君 作曲

詩

呑めよ 集へや 酔ひ狂へよ
踊れよ 唄へや 笑ひ狂へよ

一

月の随に 盈ちゆく 淡燈
蜜歌を 肴に 飲酒盃 空け干さば
深宵まで 痴れて 泥のよに 伏す
朝そら 朧にて 心と 戯る
娑婆の夢

二

なべて 蓬萊は 揺蕩う 蜃気楼
響む 晚鐘 花零る 沙羅双樹
畢竟 浮世は 泡沫よ
影映す 般若湯 酌みて 裸がむ
根無草

三

三界流転に 息つく 隙もなし
ふる 星霜に 道途 別たれど
廻り 流れて 逢はむとぞ
コチャ 杯交わせし
彼我の 郷里は 熊ぞ 棲む
蝦夷ヶ島

星よ色褪せよ

(令和四年度寮歌)

上野颯太君 作歌
渡辺麗菜君 作曲

一

蕾綻ぶ香山の

雪解はいづこや鹿仔の眼

神の食指は北を向き

羊牛摂理の空を喰む

烏合は楡の影縫わん

星の燈る野湯

二

最果て憂ぶ那由多雲

つまらぬことは不吞夜

時代に揉まれた酒に酔ひ

銃唄素知らぬ寮の歌

夜通し宵越し洄遊魚

星は明日も寝ぬ

三

雪路を征く璞玉よ

星紋寮とは誰気づく

いかれ旦那や虞美人の

出逢いと別離が恵迪町

死人に朽ち無し

さらば寮族

星よ色褪せよ

あらうれし

(大正元年桜星会歌)

横山芳介君 作歌
柳沢秀雄君 作曲

一

あらうれし
我等が生命は若ければ
熱き血潮 強き氣力に
漲る春日の 光ぞ匂ふ
あはれ吾が友
櫻と星に 明暮を
契固めて 共々に
學ぶはうれし 美しき國

二

あらたのし
我等が心は若ければ
高き希望 深き思想に
湧き来る 泉は 汲めども盡きず
あはれ吾が友
學びの苑は 常磐なり
狂ふ波折の 世に立ちて
進むはたのし 懐しき國

朝葉末の

(第三期卒業生贈桜星云歌)

加藤義夫君 作歌
角倉邦彦君 作曲

一

朝葉末の露を受け
夕歸鳥の影宿し
曙匂ふ石狩に
玉の泉と湧きしより
思へば茲に三歳の
過ぎにし水路を偲ぶ哉

二

大気は凍り雪もやの
荒れし廣野の面をこむ
時しも高く天界に
光芒強き北極星
いさごと光る星くづは
我をばめぐり走るなり

三

かつらの若芽色も濃く
森に生氣の溢る時
奇しき天地の靈受けて
大和心と咲き出でし
蝦夷の深山の山櫻
我等が理想此處にあり

四

雲漠々に水ゆるぎ
大野の心我にあり
眞理求めて息まざる
久遠の望我にあり
衆愚の聲にまどはざる
我に男の子の覺悟あり

五

消ゆる榮華を夢に見て
虚しき名をば人よ追へ
北の荒野に三百の
健兒浮雲を嘲りつ
永遠に變らぬ美土に
注ぎし汗の寶を求む

六

黄花的牧に新緑の
森に鍛へよ鐵の腕
紅葉彩どる野に山に
吹雪の里に思想鍊れ
勉めよ奮へ我友よ
やがてぞ起たん時は來ん

島浪かへる

(大正三年桜星会歌)

木原均君 作歌
岩崎直砥君 作曲

一

島浪^{しまなみ}かへる北^{ほくめい}溟^{めい}さして
石狩^{いしかり}の水^{みづ}末^{すゑ}遠^{とほ}く
霞^{かすみ}のあな^なた流^{なが}る、郷^く土^どに
あけ^あくれなれし我^{わが}友^{とも}の
學^{まな}びに集^{つど}ふ楡^ゆ影^{えい}の庭^{には}に
絢^{けん}爛^{らん}の春^{はる}またおとづれぬ

二

春^{しゅん}陽^{やう}のもと下^{した}崩^もえそめて
遙^{はる}かなるかな我^{われ}思^{おも}ひ
無^む相^{そう}の智^ち慧^ゑを追^おひ求^{もと}めつ、
無^む明^{めい}の闇^{やみ}をわ^いけ入^いりて
生^{いの}命^{のち}の流^{なが}れ深^{ふか}くも進^{すす}む
雄^を々^をしき學^{がく}徒^とこ、北^{きた}にあり

流るる光途

(大正七年桜星会歌)

一

流る、光途重ね来て
星霜此處に四十年
北斗の光眸さす所
櫻かざして先人の
樹立し歴史を偲ぶ時
誰か血汐の湧かざらむ

二

咽ぶ悲憤の誓より
早や七年の春うつり
人は変遷れど三百の
健兒不滅の意氣を持す
いでや謳はん北州の
精力に満ちし凱歌を

三

陽春の光に覆翼まれ
嫩草萌ゆる北の郷
手稻の麓健兒等が
燃ゆる想を合唱せば
牧場の彼方際涯しらず
高鳴たて、響きゆく

四

豊平川の夏の夜や
玉兎の踊る波の上
自治の流の悠久を
語る川邊に佇めば
ありし往昔を追憶へとや
古塔に響く時の音

五

こ、石狩の大沃野
静けき秋のめぐり来て
天紺青の色ふかく
地は豊穰なる平和境
人は有情の美しき
自然の愛に狎る、哉

六

萬里茫々雪の海
白龍怒り風叫ぶ
吹雪にさめし暁や
迷の雲をおしひらき
常世の幸を恵むなる
お、紅の朝日影

七

北辰冴ゆる夕まぐれ
ボーイズビー
アンビシアスの
崇高き教を胸に秘め
エルムの梢とことはの
自由の調聴くところ
若き生命を誇らばや

瓔珞みがく

(大正九年桜星会歌)

佐藤一雄君 作歌

置塩奇君 作曲

一

瓔珞^{ようらく}みがく石狩^{いしかり}の
みなもととほ
源^{げん}遠く訪^{もと}ひくれば
原始^{げんし}の森^{もり}は闇^{くら}くして
雪解^{ゆきげ}の泉玉^{いずみたま}と湧^わく

二

浜茄子^{はまなす}紅^{いそ}き磯辺^{いそべ}にも
鈴蘭^{すずらん}薫^{かを}る谷間^{たにま}にも
愛奴^{あいぬ}の姿^{すがた}薄^{うす}れゆく
蝦夷^{えぞ}の昔^{むかし}を懷^{おも}ふかな

三

今^{いま}円山^{まるやま}の桜花^{さくらばな}
歴史^{れきし}は旧^{しゆ}りて四十年^{しじゅうねん}
吾^わが学^{まな}び舎^やの先人^{せんじん}が
建^たてし功^{いさお}はいや栄^{さか}ゆ

四

その絢爛^{けんらん}の花霞^{はながすみ}
憧^{あこが}れ集^{つど}ふ四百^{よんひゃく}の
健児^{けんじ}が希望^{けぞみ}深^{ふか}ければ
北斗^{ほくと}に強^{つよ}き黙^{もく}示^しあり

五

醜雲^{しよくもき}消^ひえて人^{ひと}の世^よに
陽光^{ひかり}はうららかに輝^{かがや}けど
風^{かぜ}の名残^{なごり}のつきやらで
狂瀾^{きやうらん}さわぐ今^{いま}し今^{いま}

六

潮^{うしほ}に暮^くる西^{にし}の空^{そら}
月^{つき}も凍^{こほ}らむシベリア^{シベリア}の
吾^わが皇軍^{みいくさ}を思^{おも}ひては
猛^たけき心^{こころ}の躍^{おど}らずや

七

白銀^{しろがね}狂^{くる}ふ埋^{うも}れ路^じも
踏^ふみて拓^{ひら}かむわが前途^{ゆくて}
はろけき牧場^{まきば}に嘯^{うそぶ}けば
雲影^{くもかげ}はやし草^{くさ}の波^{なみ}

八

想^{おもひ}を秘^ひめし若人^{わこうど}が
唇^{くちびる}かたくほほゑみつ
仰^{あお}げば高^{たか}く聳^{そび}え立^たつ
羊蹄山^{ようていざん}に雪^{ゆき}潔^{きよ}し

心の故郷

(大正十一年桜星会歌)

一

心の故郷よ石狩の
夢香かなる草の野邊
花は煙りて影仄に
生命の光榮と喜悦を
恍惚につゝむ憧憬の
薔薇色の露慕はしや

二

夏の園生の逍遙や
野花の息吹に風の香に
燦めく光りさゆらぎつ
樺の緑のほの薫る
木梢に歌ふ若鳥の
朗にひゞく曙の聲

三

楡の林の星の灯よ
あはれ高鳴る靈と智の
諧調豊けき魂の琴
黄金のさやき銀のいろ
郷愁あはき秋の夜の
沈黙にふるふ星の灯よ

四

白銀の宵闇深く
氷柱に映ゆる紅の
神秘たゞよふ火明りよ
熱き情想の律動きて
明と暗との幻影に
聖き黙禱の魂ゆるる

桑榆哺紅に

(大正十四年桜星会優勝歌)

木村英男 作歌
宗知康君 作曲

一

桑榆哺紅に彩なせる
われ吾が戦友の血涙史
そは遼原の火と燃えて
今幽貌の曠野に狂ひ
凝視よ感激の胸と胸
結び輝く雙眸を

二

五障の霞はれ難き
酣春一時の綺花に酔ふ
胡蝶蒼穹ゆく夢しばし
飄帆輕き景雲の船
浮べん戦士が情懷を
讃へ唱はん光榮の優勝歌

清き郷石狩の

(昭和十五年桜星会三十周年記念歌)

岩崎五郎君 作歌
呉泰治郎君 作曲

一

清き郷石狩の曠野に
うち立てし先人が跡
乾坤に時光流れて
今ぞなる三十年の崇高き青史よ
讃へなん いざ
若き血潮 燃ゆる理想
世を覺醒し世を導かん
傳統の楡鐘高く鳴るなり

二

黒き雲世に狂へども
守り來し正義の精神
青春の生命捧げて
恵ぬなり幽遠なる眞理の秘奥
高唱はなん いざ
熱き感激 たぎる憧憬
美しく強く生かばや
雄叫びは高く湧くなり

三

天地に暴風雨吹ゆるも
東洋に夜は黎明んとす
世界を救ふ大理想もて
うち立てん永劫の平和の大旆
叫ばなん いざ
湧ける激情 あがる歡喜
楡の舎の健兒我等は
生ける證に胸は湧くなり

四

悠久の時の移ろひ
青春のこの瞬間を
星辰澄きエルムの園に
過すなり涯際なき神秘の懷中に
仰がなん いざ
清き生命 高き意欲
先人の遺せし教訓
我等が魂強く打つなり

Bye-Bye!

水野涉君 作歌・作曲

一

バイバイ

だからバイバイ

今日よさようなら

もう^{にど}度と来ない

今日の^ひ日にバイバイ

三

バイバイ

寮^{りょう}よバイバイ

寮^{りょう}よさようなら

もう^{にど}度と来^こない

今の寮^{りょう}にバイバイ（※この曲に、定まった詞はこの

ゑつ位^{いま}であとはアドリブで思いつくままに、体力の

続く限り果てしなく歌う。作者はこの曲と「みんな

想い出になっちまえ」という^ゑ曲を残して昭和五十

八年二月四日夜明け前自らこの世を去っていった。）

二

バイバイ

今^{いま}よバイバイ

今^{いま}よさようなら

もう^{にど}度と来^こない

この今^{いま}にバイバイ

ストームの歌

―― 醒めよ迷ひの夢さめよ
醒めよ迷ひの夢さめよ――

一

札幌農学校は蝦夷ヶ島 熊が棲む
荒野に建てたる大校舎 コチャ
エルムの樹影で真理解く コチャエ コチャエ

二

札幌農学校は蝦夷ヶ島 手稲山
夕焼け小焼けのするところ コチャ
牧草片敷き詩集読む コチャエ コチャエ

三

札幌農学校は蝦夷ヶ島 クラーク氏
ビーアンビシアスボーイズと コチャ
学府の基を残し行く コチャエ コチャエ

※色部米作君が、明治三十八年頃、一番の

歌詞を作った。明治四十三年九月に

加藤茂雄君が二番を、

出納陽一君が三番をそれぞれ作詞した。

不老の青春

(恵迪寮百周年記念寄贈寮歌)

千川浩治君 作歌・作曲

一

三代に亘りし 恵迪寮
歴史も経りて 一世紀
祝うは嬉し この寮に
団欒も楽し 記念祭

二

歳を重ねて 恵迪は
自今は女子 男子らは
高邁なりし 理想など
日夜に励み 探求むなり

三

拓きたる野は ビルの谷
創成川の 柳 何処
憩いとなりし 榆ポプラ
若木に伝う 紳士道と

四

世にも希なる 樂しみは
魂に触れし 若き日の
共に過せし 思い出を
寮友らと語る この時ぞ

五

始皇夢むは 千万世
我らが寮歌は 永遠に
歌い継がれて 尚創り
不老の青春を 歌わなん

開校祝賀の歌

（明治四十年 札幌農学校より
東北帝国大学農科大学となりし時）

一

神統二千五百年

東海の果に眠りたる

大和島根の民衆は

見よや目覚めて明治の世

天の使命を果すべく

進取の旗を振り立てぬ

三

此の国運に魁し

先づ北辺の島の上

荒蕪を拓き民を植ゑ

不明を教へ道を樹て

進取の民の範たりし

百万の民若かりき

五

今や羽翼を整へて

徳乾坤を被ふ可き

国の使命を提げて

千余の学徒磨き

坤輿の民の師たる可き

新職分は下りたり

七

功利若し世の風たらば

其所に我等の戦あり

遊惰若し世の俗たらば

其所に我等の戦あり

邪曲若し世の弊たらば

其所に我等の戦あり

二

天に二つの日なければ

地上を西し東せる

文化の潮渦巻きて

日出づる国に相会し

炳焉として虹の如

乾坤茲に光あり

四

此の民衆を導きて

重き使命に負かじと

我が札幌に建てられし

祖校よく其の任に耐へ

北辰高く輝きし

其の名声や將た説かじ

六

思へ嘗ては北辰と

光を競ひ白雪と

意氣争ひし校風を

享けし我らの前程は

高く大きく清らなる

希望の色に溢れずや

八

楡の梢風鳴りて

平和の歌をなすが如

藻岩の雲の峯そひて

莊嚴の色動く如

我等の歌に歓喜と

自信の響こもれかし

北海道帝国大学独立記念歌

(大正七年)

一

都みやこの花はなを吹ふく風かぜの
津つ輕がるの海うみをこえくれば
石いし狩かりの野の邊べ雪ゆき消きえて
うわら若かく草さの香かも高たかく
白しら雲くも空そらに行ゆき通かひて
羊ひつじの夢ゆめぞ長のど閑かなる

二

さあへいれ平わ和めの夢ゆめの夢ゆめ
見みよ西せい欧おうの空そらの樣よう
怪かい雲うん荒すさび暴あらし風ほ吠え
シはるベリいろや春はるの色いろもなく
狂きやう風ふう千せん里り胡こ砂さを捲まき
日に本ほん海かいに波な高たかし

三

今いまぞ皇み国いく多た事じの時とき
北きたの守まもりの北ほく州しゅうに
護ご国こくの子こ等らが学まなび舎やの
弥やや栄さかえゆよろこく喜こひを
心こころに永ながくしるさんと
歌うたこゑ高たかき春はる今こ宵よい

ラグビー部部歌

一

黄塵^{こうじん}はるか 隔^{へだ}てたる

ここ北溟^{ほくめい}の 原始^{げんし}林^{りん}

巢立^{すだ}ちし 若^{わか}き荒鷺^{あらわし}の

意気^{いき}ぞ満^みてる フェアプレー

見^みよ 意気^{いき}の 北大予科^{ほくだいよか}ラガー

ファイト ファイト

ファイト ファイト ファイト

オンワーズ ヴィクトリー

二

残陽^{ざんよう}西^{にし}に 茜^{あかね}して

五彩^{ごさい}の雲^{くも}の はゆるとき

ダーク・グリーン^{ダーク・グリーン}の 若武者^{わかむしゃ}の

熱^{ねつ}ぞ満^みてる フェアプレー

見^みよ 熱^{ねつ}の 北大予科^{ほくだいよか}ラガー

ファイト ファイト

ファイト ファイト ファイト

オンワーズ ヴィクトリー

坂井稔君 作歌
飯田毅君 作曲

ラグビー部賛歌

村岡五郎君 作歌・作曲

石狩いしかりの原はらに草くさ萌もえ
熱砂ねっさ巻まく夏なつの大おお空ぞら
茫々ぼうぼうと凍こる荒あら野のや
夕月ゆうづきに秋あきは落おつとも
血ちと汗あせに若わかき獅し子し群むれ
球たまを追おひて大だい地ちを駈かける

山岳部部歌 — 山の四季 —

(昭和十四年頃)

朝比奈英三君 作歌

渡辺良一君 作曲

一

ふぶきの尾根も 風止みて
春の日ざしのおとずれに
沢のなだれも 静まりて
雪げの沢の 歌樂し
いざ行こう 我が友よ
暑寒の尾根に 芦別に
北の山のさらの尾根を 飛ばそうよ

二

沢を登りて いま五日
ワラジも 足に 親しみぬ
三日三晩の 籠城も
過ぎて 楽しい 思い出よ
いざ行こう 我が友よ
日高の山に 夏の旅に
北の山のカールの中に 眠ろうよ

三

山は紅葉に 色どられ
頂高く 空澄みぬ
新雪輝く 山は
いづれも 親しき 友だちよ
いざ行こう 我が友よ
ニセイカウシュベに トムラウシに
北の山の沢の たき火に 語ろうよ

四

吹雪も 止んだ 朝まだき
凍った テントを 起き出でて
はるかに のぞむ やせ尾根は
朝焼け 燃ゆる ペテガリだ
いざ行こう 我が友よ
氷の尾根に アンザイレン
北の山の 聖き 頂 目指そうよ

漕艇部部歌

——春三月の（茨戸の歌）——

（昭和三十年）

木原慎一君作歌・作曲

一

春三月の蝦夷島

長き眠りにとぎされし

茨戸河畔の雪とけて

とく待ちわびし水の子の

喜び笑ふ声すなり

二

岸の辺近く郭公の

啼く音うれしく聞き初めね

漕ぎ来し方を眺むれば

霞にとける野の煙

水郷の春の昼閑か

三

岩燕は去りて風熱き

夏たけなはの候となる

運河一発引き抜きて

しばし憩はむ土手の上

羊も寄りて草を食む

四

いつか炎暑の日はゆきて

光のどけき茨戸河

青き水の面に波立たず

こよなき季節訪れぬ

心ゆくまで漕がむかな

五

手稲は紅く空高く

秋の気深くなりにけり

かい先近くぼらはねて

夕練習終へるころ

陽はくれないに没したり

六

河霧深くたちこめて

霜結ぶ朝艇出す

みぎわの木々は枯れはてて

冬もま近となりぬれば

惜しみて漕がむ残る日々

七

北風ささび雪は舞ひ

ふぶきに暮れる冬の河

今日ぞわれらが漕ぎ納め

いざわが友が胸深く

また来む年の幸思へ

ヨットマンの歌

一

腰こしのシーナイフにすがりつき

ついて行きます何処どこまでも

ついて行くのは易やすけれど

女乗おんなのせない三号艇さんごうてい

二

女乗おんなのせない三号艇さんごうていなら

長い黒髪くろがみ断きち切きって

可愛いクルーになりすまし

ついて行きます何処どこまでも

三

四年三年ジジクサイ

二年にねんそれかのじよ彼女かのじよあり

可愛い一年いちねんにや金かねが無ない

女泣おんななかせのヨットマン

四

いいじゃありませんか

ヨットマンは

ボロのズボンにボロのシャツ

ポロのヨットに乗のつてても

腕うでは確たしかなヨットマン

五

いいじゃありませんか

ヨットマンは

欠かけた茶碗ちやわんに折おれた箸はし

クサレズツペにクサレ飯めし

それでも生いきてるヨットマン

六

いいじゃありませんか

ヨットマンは

太ふとい腕かいなに黒くろい顔かお

キリリと締しまった口許くちもとが

グーッといかすぜヨットマン

七

浜はまの娘むすめが噂うわさする

愛いとしあの人ヨットマン

お嫁よめに行くならヨットマン

今夜こんやも楽たのしい夢ゆめを見る

ヨットマン ヨットマン

ヨットヨットマン

水産放浪歌

富貴名門の女性に恋するを純情の恋と誰が言うぞ。

暗鬼紅灯の巷に彷徨う女性に恋するを不情の恋と誰が言うぞ。

雨降らば雨降るもよし風吹かば風吹くもよし

月下の酒場にて媚を売る女性にも純情可憐なる者あれ。

女の膝枕にて一夜の快楽を共に過さずんば人生夢もなければ恋もなし。

響く雷鳴 握る舵輪 睨むコンパス六分儀

吾ら海行く鷗鳥 さらば歌わん哉

吾らが水産放浪歌

一

心猛くも鬼神ならず

男と生まれて情はあれど

母を見捨てて浪越えてゆく

友よ兄等よ何時また会わん

二

朝日夕日をデッキに浴びて

続く海原一筋道を

大和男子が心に秘めて

行くや万里の荒浪越えて

三

浪の彼方の南氷洋は

男多恨の身の捨てどころ

胸に秘めたる大願あれど

行きて帰らじ望みは待たじ

注 成立事情不明なるも蒙古放浪歌

(仲田三孝作詞、川上義彦作曲)の

換え歌と推定される。